

江戸からつなぐ歴史と文化

# 江戸・たいとう学

講演記録集



江戸からつなぐ歴史と文化

# 江戸・たいとう学



講演記録集

## はしがき

本区には、江戸の昔から続く伝統行事や神社仏閣、名所旧跡の数々があり、まちや暮らしの中には今もなお、江戸のこころと文化が息づいています。

区では、江戸から明治へと時代が変わり、「東京」が誕生して百五十年の節目の年である平成三十年を「江戸ルネサンス元年」と位置づけ、本区に色濃く残る江戸の文化資源『江戸たいとう』の魅力を発信する「江戸ルネサンス事業」を展開してまいりました。

そして、令和五年度は、学びの視点から『江戸たいとう』の魅力に迫る「江戸・たいとう学」を開催し、江戸期における各分野の専門家の方々をお招きした多種多彩な講演会などを行いました。本書は、「講演から学ぶ」と題した、全八回にわたる講演会を中心とした記録集です。本書を通して、江戸と本区の結びつき『江戸たいとう』の魅力を感じていただければ幸いです。

令和七年は、江戸時代の台東区を舞台とした大河ドラマ「べらぼう 蔦重栄華乃夢斬」が放映されます。また、本区の誇りでもある東叡山寛永寺が創建四百周年を迎えます。これを契機とし、『江戸たいとう』のさらなる魅力を、国内外に広く発信してまいります。

結びに、本事業を監修いただいた東叡山寛永寺の浦井正明住職をはじめ、多大なるご協力を賜りました講師、関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

令和六年十二月吉日

台東区長 服部 征夫



おはしがき

目 次

キックオフイベント

- 第一部 基調講演 「江戸から未来を考える」  
 第二部 トークセッション

講師 田中優子 ..... 8  
 出演者 浦井正明 田中優子

大石学 服部征夫 ..... 15

連続講演会第一回 江戸城の構造とその仕組み

講師 深井雅海 ..... 23

連続講演会第二回 日光・上野東照宮の大工たち

——中井正清・甲良宗広・鶴正村——

講師 波多野純 ..... 39

連続講演会第三回 大奥の御用商人

講師 畑尚子 ..... 55

目 次

Ⅱ あとがき・講師紹介

|              |                            |     |       |     |
|--------------|----------------------------|-----|-------|-----|
| 連続講演会第四回     | 家康と天海                      | 講師  | 浦井 正明 | 71  |
| 連続講演会第五回     | 江戸の外交と海外情報                 | 講師  | 松方 冬子 | 87  |
| 連続講演会第六回     | 江戸の建築                      | 講師  | 稲葉 和也 | 103 |
| 連続講演会第七回     | 江戸の絵巻を読み解く                 | 講師  | 小澤 弘  | 119 |
| 連続講演会第八回     | クロージングイベント<br>——将軍伝説と京都化—— | 講師  | 大石 学  | 136 |
| 第一部 講演会      | 首都江戸の権威化                   | 出演者 | 浦井 正明 | 146 |
| 第二部 トークセッション |                            |     | 大石 学  |     |





キックオフイベント（令和五年九月二日開催）

第一部 基調講演

「江戸から未来を考える」

講師 田中 優子

第二部 トークセッション

出演者 浦井 正明

田中 優子

大石 学

服部 征夫

## 第一部 「江戸から未来を考える」

### ◆価値観の転換を成し遂げた江戸時代

「真の文明ハ山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし」。日本初の公害である足尾銅山鉍毒事件を告発した政治家田中正造が、明治四十五（一九一二）年に日記に記した言葉です。日記にある真の文明とは、まさに江戸時代に実現されていたことです。また、幕末から明治期に日本を訪れた外国人の記録や感想を詳細に書いた渡辺京二氏の代表作『逝きし世の面影』にも、「江戸文明が滅んだ」という内容が書かれています。次の時代をどのように切り開いていくかを考えたとき、江戸時代を参考にしますと、本当にいろいろなことがわかります。本日は「江戸から未来を考える」をテーマにお話をさせていただきます。

西暦一五〇〇年代、ヨーロッパでは大航海時代が始まります。その頃日本は江戸時代の前の室町時代から安土桃山時代です。日本は豊富な鉍物資源を使って中国から物資を大量に輸入していましたが、アメリカ大陸からの銀には敵わず、経済的窮地が少しずつ進んでいきます。内戦も続いており、領土拡大のため朝鮮半島を侵略しますが敗戦し、さらに経済は疲弊します。その後江戸時代となりますが、いきなり体制を変化させるのは難しいことです。徳川幕府は三十年以上の年月をかけて、三代將軍家光の頃までに江戸時代らしい体制を着々と整備していきました。

幕府はカトリック国の植民地政策に対応する施策として、貿易制限を行います。貿易制限に

よって、外国との戦争を回避できました。また、全国の大名の江戸城登城を義務づける参勤交代制度によって、内戦が起こらなくなりました。江戸時代は約二五〇年もの間、平和が続いた時代です。ところで、参勤交代による人口増加に伴い、ゴミや排泄物の問題が発生します。この解決のために作り上げられたのが、都市で出た排泄物を農村で肥料として使うなどの循環システムです。つまりインフラを整えていったわけです。そしてもう一つ。これまでの輸入依存から国産技術への転換があります。このことによって大勢の職人が誕生し、「ものづくり日本」が創造されていきます。いいものを輸入してそのまま使っていた時代から、いいものを自分たちで作って売る時代へと転換していったのです。

江戸時代に発明されたものに、和時計があります。時計は江戸時代以前にヨーロッパから入ってきていましたが、日本とは時刻の測り方が違うので使えませんでした。そこで、江戸時代の人々の時刻の測り方に合わせて、太陽が昇ってから沈むまでの間を六等分にした和時計が作られました。輸出品も次々に作られます。例えば中国・景德鎮けいとくちん（現在の中華人民共和国広西省景德鎮市）で生産されている磁器を作り、伊万里港から積み出します。これが伊万里焼で、ティーポットなどをヨーロッパの注文で作っていました。中国の磁器を真似て作っているうちに職人の技術が向上し、日本らしいデザインが出現します。その代表が鍋島です。鍋島は輸出用ではなく、大名家同士で贈り合う際に使われた磁器で、大名家のセンスが表れています。

インドから入った更紗さらさや絹木綿しきもめんなどの布も日本で生産します。鍋島更紗、彦根更紗、京都更

うな柄は、初期は日本刺繍で描かれていましたが、その後友禅染めなどの技法が出てきます。

浮世絵の世界では、ヨーロッパから入った遠近法を取り入れるようになりました。ただし風景を描くのではなく、劇場や遊郭の中を描くときに使っています。この浮世絵は浮絵うきえというもので、近くが浮き出て見えるのでこう呼ばれていました(図2)。浮絵は芝居を描くことが目的ではなく、絵を見た人をそこにいるような気分させることが目的なのだと思います。



(図1)『風俗四季歌仙 水無月』鈴木春信画 (和泉市久保惣記念美術館蔵)

紗などが日本各地で作られました。江戸の人たちは特に縞木綿が好きで、縞の着物と縞の帯を身につけた男女が浮世絵にも描かれています(図1)。また、布の世界でも日本独自のものが生まれました。風景が描かれた着物で、萩の花が一面に咲いている中を川が流れていたり、海の上空をたくさん鶴が舞っていたり。このよ



(図2)『浮絵 歌舞伎芝居之図』歌川豊春画 (国立劇場蔵)

◆ 「治める」体制の構築と循環型社会

江戸時代初期は東南アジアとの交易が盛んで、東南アジア諸国の港町に日本人町ができました。その頃の貿易商の多くはキリシタンでした。キリシタン組織が日本に入ってくることを恐れた幕府は、寛永十二（一六三五）年、海外渡航禁止令を出します。日本船の海外渡航と在外日本人の帰国を禁じたのです。さらに、長崎出島にいるオランダ商館長一行の江戸参府も開始します。これは長崎通商免許の御礼を目的として将軍に謁見するもので、オランダ商館と幕府が良好な関係



(図3)『両国橋 TWEELANDBRUK』司馬江漢画  
(神戸市立博物館蔵)

日本に風景画浮世絵はずっと存在しませんでした。それは、そもそも浮世絵は人物を描くものだったからなのですが、ヨーロッパから銅版画が入ってきてからは風景画浮世絵も描かれるようになりました。銅版画で『両国橋 TWEELANDBRUK』を描いた司馬江漢<sup>しばこうかん</sup>は元浮世絵師で、日本でいち早く銅版画の技術を取り入れた人です。絵をよく見ると、遠近法で隅田川が描かれています（図3）。

さて、江戸時代がどのようにして「ものづくり日本」を創造してきたかをお話ししてきましたが、続いて幕府の政治体制についてお話しします。



(図4)『画本東都遊』葛飾北斎画  
(国立国会図書館蔵)

を保つための重要な行事です。オランダ人たちが江戸に滞在している様子は、葛飾北斎の浮世絵にも描かれています(図4)。

朝鮮との外交関係は、朝鮮通信使という形で使節団が来日することで整えました。一度に四〇〇人から五〇〇人の朝鮮通信使が来日することもあり、馬上サーカス団が来たこともありました。それから琉球使節です。琉球王国に侵略した薩摩藩を通じて、

日本へ使節を送ることを求めたもので、その後薩摩藩は幕府を後ろ盾にして琉球の人事、税金、貿易の管理、外交への発言権を握るようになりました。このようにして、幕府は「治める」体制を構築していきます。

では、町や村はどのようなようになっていたのでしょうか。武士階級は人口の十パーセントぐらいですから、武士が日本全体を治めることはできません。そこで自治的な組織をつくることになりました。江戸の場合は幕府奉行職の下に町年寄が三人います。それぞれの町年寄の下に町名主がいて、その下に家主(大家)、その下に住民がいます。大家は部屋代を取っているだけではなく、店子の名簿を作ったり、町の辻々にある番所に交代で詰めたりもしています。町全体を守る役割があったのです。

幕府の領地の場合は幕府代官、藩の領地の場合は藩役人がいて、村には庄屋または名主、百姓代、組がしらの三人が同列でいて、そのもとに住民がつくる寄り合いが構成されます。名主、百姓代、組がしらの三人は、現在の議会である寄り合いの意見を、幕府代官や藩役人に伝えます。村には、このような制度上の組織のほかに、生活上の組織もありました。年齢階梯組織の若者組、娘組、老人組、屋根を葺くための茅講、お金を出し合って困ったときに助け合う無尽講など、非常に細かく分かれていて、生活を成り立たせていました。

最後に循環型社会についてお話しします。江戸時代初期、人口増加や大名屋敷建設の集中などによって森林の過剰伐採が行われ、その結果、洪水が起ります。幕府はこのことを深刻に考え、当時の学者も建築材料を無駄に使うのではなく再利用することを提案しています。無駄をなくし、健全な循環をすることが豊かな世の中を作っていくという考え方が浸透し、循環型社会が作られています。

下肥しもこえは、人間の排泄物を肥料として活用するものです。農民が直接取りに来ていた時代もありましたが、下肥問屋まちかたができると排泄物が商品化されます。人足が取りにきて、武家には野菜などの現物を渡し、町方には金銭を支払います。持ち帰った排泄物は発酵処理をして肥料にして、農家に売ります。都市で買い取ったものを農村に売るといふ問屋制度が成立します。

着物も循環します。洗い張りを繰り返して、仕立て直しもします。ほとんどの武士は貧しく、古着を着ていますので、古着屋が栄えます。店舗を構えている古着屋と、各家を回って販売する古



(図5)『広重戯画 寺子屋遊び』広重(歌川廣重)画  
(公文教育研究会蔵)

着屋がありました。紙くずもそうです。集めて漉き返し紙を作ります。行燈の明かりはとても暗く、現代の私たちが読んでいるような活字の本は読めません。でも江戸時代の本は墨の色が違うので、行燈の明かりでも読めるんです。「明るくしよう」ではなく、「暗い行燈でも読めるように本を印刷しよう」という発想なのですね。

江戸時代には古傘買、錠前直し、鋳鉄屋、瀬戸物焼接、羽織紐直し、灰買などの仕事がありました。紙も布も最後は灰になり、灰買が買い取った灰は肥料になります。

ものづくりや循環型社会についてお話してきましたが、江戸時代は教育という面でも新しい時代を切り開いたのです。嘉永三(一八五〇)年頃の江戸での就学率は七十〜八十六パーセント。これは農村部も含めた江戸府内全体の数ですから、寺子屋に行かない子どもはほとんどいなかったということになります。寺子屋に来ている子どもたちは年齢差や実力差があるので、個人指導制です。先生は、複数の子どもたちの家庭教師をやっている感じでしょうか。教科書は「往来物」という手紙文で、コミュニケーションを徹底的に学びます。浮世絵にも寺子屋で楽しそうに学ぶ子どもたちの様子が描かれています(図5)。

## 第二部 トークセッション

### ◆台東区の未来を拓く「江戸・たいとう学」

**浦井**…台東区では、服部区長の発案で「江戸ルネサンス事業」に取り組んできました。発想の原点をお聞かせください。

**服部**…台東区には江戸から続く歴史や文化が息づき、現代を生きる私たちにとっても学ぶべき点が多くあります。世界でも稀な百万都市として発展し、教育は世界の最高水準にあり、浮世絵がゴッホやモネら印象派の画家に大きな影響を与えたことでも知られています。「江戸ルネサンス事業」は、「江戸に学び、未来を拓く」をテーマに、江戸から明治へと時代が変わり東京が誕生した年から一五〇年目の節目の年、平成三十（二〇一八）年に開始しました。

平成三十年度から令和四年度にかけて、「江戸ルネサンス事業」の中心事業である講演会シリーズ「江戸から学ぶ」を開催し、十七回の連続講座などを実施して、延べ三〇〇〇人を超える方々に受講していただきました。

**浦井**…「江戸ルネサンス事業」は令和四年度で一区切りとなりましたが、もう一年、「江戸・たいとう学」を実施されたのはなぜですか？

**服部**…大河ドラマ『どうする家康』で、江戸時代に注目が集まりました。台東区には上野の寛永寺や東照宮、浅草の浅草寺など徳川家ゆかりの寺社があり、祭りや伝統芸能、伝統工芸など、江

戸から続く文化が受け継がれています。江戸文化の中心であった本区の魅力をさらに発信することが、区の未来を拓く活力になるの思いから、「江戸・たいとう学」を実施しました。

### ◆江戸時代から学ぶ多様性

**浦井**…いよいよ本題に入ります。田中先生、基調講演では素晴らしいお話をありがとうございました。大石先生、どんな感想やご意見をお持ちでしょうか？

**大石**…環境、格差、戦争など、深刻な状況に遭遇している私たちは、今の時代、未来に向けてどのような価値観を見出すべきか。そのようなことを考えながら、お話をうかがいました。江戸時代のリサイクルについて、余裕がなかったからリサイクルせざるを得なかったのではないかという意見もあります。たとえそうだとしても、物を大事にして最後まで使い切ることは、今日でもやはり重要なことだと思います。

また、行燈の明かりが暗ければ、それに合わせた生活をすればいいというお話。私もそう思います。他方、江戸時代にも、油を二倍も三倍も使っても明るくすることが豊かさではない



かという主張もありました。尾張藩主の徳川宗春は八代將軍吉宗の掲げる質素儉約政策に反論し、吉宗と対立し蟄居ちつきよ謹慎させられました。江戸時代にも政治的緊張関係や政策の対立があったことを知ることも、江戸をより深く理解することにつながると思います。

浦井…田中先生、付け加えたいことがありましたらどうぞ。

田中…大石先生、貴重なご意見ありがとうございます。江戸時代は長い時代ですから、それぞれの時代の特色を私たちは見ていかなければならないと思います。基調講演の最後に、教育についてお話ししました。私がすごいなと思うのは、私塾です。なぜ私塾がたくさんできたのかというと、思想が多様にあるからです。

幕府は儒学の中の朱子学を奨励していましたが、江戸時代の中頃に儒教や仏教の考えにとられない国学という学問が生まれてからは、これに反論する人が出てきました。日本古来の古典から考え直そうと言いだめたわけです。さらに国学以外からもいろいろな考え方が次から次へと出てきて、私塾も増えていきます。昌平しょうへい黌けいのような幕府の学校では朱子学を学びますが、私塾でどのような学問を学んでも幕府は弾圧しませんでした。学問の多様性は自由で、こういう思想はダメだということはなかったんですね。

ただしここで気になるのは、私塾へ行くのはほとんどが男性だということです。女性は寺子屋へ手習いに行き、和歌や琴や三味線も習います。しかし和歌を習っている女性の中に国学に関心を持っている人がいたとしても、学問の世界に正面から入って議論する姿は見えてこないんです。

それから私塾は寄宿舎生活なので、お金が必要です。行ける人と行けない人がいます。農家の長男も家業を継がなくてはならないので、ほかにやりたいことがあってもできません。下級武士も、その貧しさから、武士階級の格差が非常に大きいことがわかります。江戸時代の多様性と格差について、現代の自分たちと照らし合わせてみても面白く、いろいろなことが発見できると思います。

### ◆琉球使節と朝鮮通信使

**浦井**…田中先生のご講演にもありました琉球使節と朝鮮通信使について、両先生のお考えをお聞かせください。まずは田中先生、お願いいたします。

**田中**…これは江戸時代の外交の中心と言っていると思います。琉球使節については、その前に薩摩藩が琉球を侵略していますが、琉球王国を消滅させた明治以降の侵略とは違い、石高を薩摩藩のものにしたいという思惑があつての経済面での侵略です。独立王国である琉球から日本に使節を送っています。朝鮮通信使の場合は、まず朝鮮侵略があつて、そこから関係改善の道を探ったわけです。朝鮮側は、通信使を日本に送ることは日本の状況を観察できる重要な機会でしたし、当時の日本人は中国から直接学んでいる朝鮮の人たちを大変尊敬していました。私たちはこういった歴史をもっと知っておく必要があると思っています。

**浦井**…大石先生、付け加えることはございますか？

**大石**…江戸時代は二五〇年以上、国内戦もなければ外国との戦争もない、世界史でも珍しい長期

の「平和」な時代でした。その前の一〇〇年以上は、人の命を奪えば奪うほど、人の土地を奪えば奪うほど英雄になれる戦国時代でした。このベクトルを一八〇度変えたのが、徳川家康から三代将軍家光ぐらいまでの時代です。現代の私たちも、かつて祖先がやり遂げたように価値観を転換する必要に迫られています。しかし価値観の転換は、トラブルを伴います。その際、武力ではなく法律で解決することが大切です。アメリカ社会では銃使用の事件がよくニュースになります。こうした事件が日本で少ないのは、兵農分離という江戸時代の制度、すなわち武器を国家が管理する政策が根底にあり、武力による紛争を防いでいるともいえます。

国外との緊張関係についても同様です。豊臣秀吉が朝鮮へ出兵した結果、中国・朝鮮との戦争が二度にわたって朝鮮半島で行われました。秀吉が亡くなり日本は撤退しますが、徳川家康は覇権を握るとすぐに、戦後処理をします。朝鮮から日本に通信使が到来するようになり、中国とは長崎で貿易を行いました。その後、鎖国体制が整備されますが、両国とは「平和」な関係を続けました。

その後、ヨーロッパではクリミア戦争、アメリカでは南北戦争などが起きますが、日本は「平和」を維持しました。私たちは、戦後復興し長期の「平和」社会を築いた江戸時代の最初の三十二年間を、より深く知る必要があると思います。

## ◆江戸の循環型社会と川の役割

**浦井**…循環型社会について、両先生のお考えをお聞きしたいと思います。

**大石**…日常生活の中で、徹底的に物を使い尽くす方向にダイナミックに政策を展開したのは、八代將軍吉宗と大岡忠相<sup>ただすけ</sup>です。享保<sup>きょうほう</sup>の改革の一環として、武蔵野台地に武蔵野新田を開発し、畑作の農村を作ります。首都江戸に野菜類や穀類を供給する大供給地としたのです。すると、農村から江戸へ日々野菜を供給し、江戸から出る膨大な下肥を農村に投入するというサイクルが形成されます。江戸の膨大な下肥の処理ができ、野菜も効率よく作れるわけです。こうしたことが、江戸の首都機能発展の基礎になりました。

**田中**…そのとおりです。そして、畑には水が必要です。例えば玉川上水は、江戸のために開鑿<sup>かいさく</sup>されたのだと考えていましたが、そうではなく、畑作のために必要だったということを学びました。それから大きな川は流通に必要です。現代はトラックが高速道路を使つてものを運んでいます。江戸時代は船で運んでいました。それにはたくさん川の必要となります。江戸時代後期に描かれた『江戸名所図会』を見ますと、現在は消滅してしまったたくさん川の川が流れています。

**浦井**…多摩川から玉川上水を引く工事を請け負った玉川庄右衛門・清右衛門兄弟の墓所は、台東区の聖徳寺にありますので、ぜひお参りをしていただけだと思います。田中先生のご指摘にもありましたが、江戸時代は水運の時代です。台東区には昔の川を埋め立てた暗渠<sup>あんきょ</sup>がたくさんあり、

かっぱ橋本通りもその一つです。寛永寺の本堂は、三代將軍家光が喜多院の薬師堂として建てたお堂ですが、明治九（一八七六）年から十二（一八七九）年に解体をして、<sup>いかだ</sup>筏に組んで新河岸川から隅田川を流して、寛永寺まで持ってきたものです。この一例からも、明治初期でも水利がいかに大きな役割を果たしていたかがわかると思います。大石先生、このような件について、何かございますか？

**大石**…技術の問題ですね。現在の日本の中小企業が担っているような世界に通用する精緻な技術も、江戸時代に始まったといえます。これを今日の合理化・効率化の視点から切り捨ててしまうのはもったいないことです。電気が止まったり、ガソリンが供給されなくなっただ場合の技術のあり方を、私たちは維持・継承しておく必要があるのです。

**浦井**…幕末から維新にかけて多くの外国人が日本に来て、大変感心をしています。この点について、一言お願いします。

**田中**…当時の外国人の感じ方は、もしも私たちが江戸時代にワープできれば、そのときの感覚とよく似ているのではないかと思います。好奇心旺盛なよく笑う日本人が見えています。私が今関心を持っているのは、江戸時代のコミュニティです。コミュニティ



というと集落のコミュニティを連想しますが、式亭三馬しきていさんばが書いた滑稽本『浮世風呂』などを読みますと、これもコミュニティだなと思います。町人の中に共有する知識や価値観があつて、それを語り合い、喧嘩もします。江戸時代の生活の中にある価値観や生き生きとした感情を、私たちはまだまだ発掘できていません。そしてそれを発掘することは、今後の現代社会を活性化させる人間関係の一つのモデルになり得るのではないかと思っています。

**浦井**…最後に服部区長、何かございますか？

**服部**…本日はキックオフイベントということでしたが、これから全八回の連続講座を開催いたしますので、ご期待ください。そして、江戸、特に化政文化の中心がここ台東区であったということさらには私どもは認識しながら、それを未来につなげていければと考えております。



連続講演会第一回（令和五年九月二十四日開催）

# 江戸城の構造とその仕組み

講師  
深井  
雅海

## ◆政庁であり将軍が暮らす江戸城の構造

江戸城の構造と、そこで行われていた儀式や将軍への御目見<sup>おめみえ</sup>、老中<sup>ろうじゅう</sup>による申し渡し<sup>うちかへ</sup>が、城のどこで、どのように行われていたのか、その仕組みについてお話しいたします。

まずは江戸城の構造からです。江戸城の内郭<sup>うちくるわ</sup>の中には本城と西城があり、本丸は現在、東御苑と呼ばれています。大手門を入ると、今は埋め立てられていますが堀があって、下乗橋という橋がかかっていました。大手三之門を通りいくつかの門をくぐると、玄関に到達します。そして玄関前門（中雀門）を通ると、約一万一三〇〇坪の巨大な御殿が建っています。ここが徳川幕府の政庁であり、将軍の住まいである本丸御殿です。天守台は現存しますが、天守閣は四代将軍家綱の時代に明暦<sup>めいれき</sup>の大火により焼けてしまったため、江戸城は天守閣のない城となっています。

西城には、六〇〇〇坪くらいの大きさの西丸御殿が建っています。こちらは将軍を退いた大御所<sup>おおごしよ</sup>、あるいは次の将軍となる継嗣<sup>けいし</sup>の住まいとして使われました。そのほか内郭の中には、将軍家の家族同様に扱われた田安德川家、清水徳川家、一ツ橋徳川家の御三卿の屋敷も設けられていました。

江戸幕府は大名に対して、登城時からさまざまなルールを定めていました（図1）。元禄十二（二六九九）年、綱吉時代の記録によると、大名はまず大手門の手前の大手下馬所で多くの家臣を残していきます。二〜三万石の大名で六十人くらいの供を連れていて、そのうちの五十人くら

| 登城の経路 | 四品(従四位下)10万石以上 | 1万石以上 |
|-------|----------------|-------|
| 玄 関   |                |       |
| ↑     | 侍三人            | 侍一人   |
| 中雀門   | 草履取一人          | 挟箱持一人 |
| ↑     |                | 草履取一人 |
| 中之門   |                |       |
| ↑     |                |       |
| 大手三之門 |                |       |
| ↑     |                |       |
| 下乗橋   |                |       |
| ↑     | 侍六人            | 侍四人   |
| 大手門   | 草履取一人          | 挟箱持一人 |
| ↓     |                | 草履取一人 |
| 大手下馬所 |                | 侍四・五人 |

(図1)登城の経路と供の人数(元禄12年[1699])

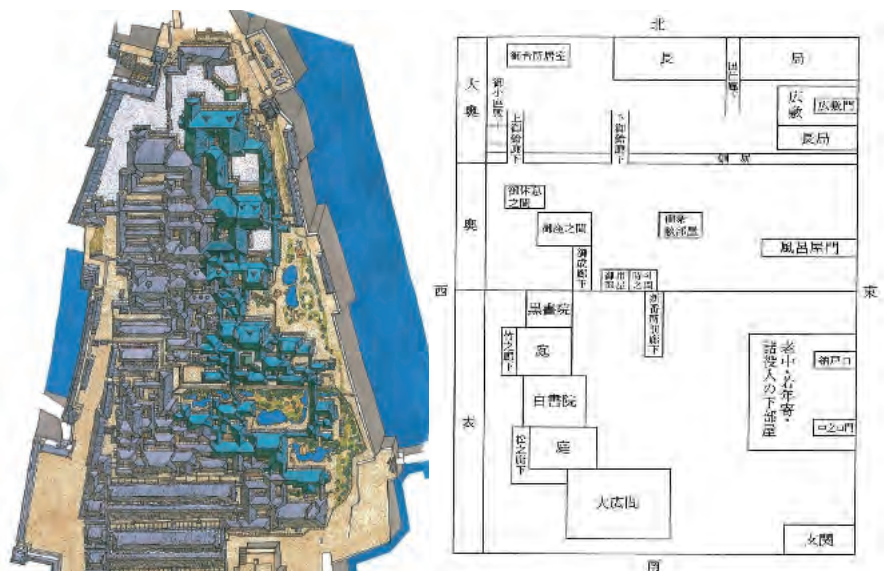
出典：深井雅海『江戸城一本丸御殿と幕府政治』

(中公新書1945)2008年、13ページ

で、御三家など特別な大名を除き、供の者も入ることはできませんでした。

もう一つ、武士というと大小刀を差すわけですが、そのうちの大刀は御殿に持ち込めないという決まりもありました。刀番は玄関の外に待機していなければいけないということです。ところがここでも格式があり、玄関の式台まで刀番が上がる大名がいました。享保三(一七一八)年、吉宗時代の規定では十三人の名前が挙がっています。内二人は前田家、一人は池田家の外様大名、それ以外は徳川一門です。前田家と池田家は初期の当主の母親が家康や秀忠の娘であったため、特別な扱いをされていたと推測します。なお、この名簿の中に、御三家は入っていません。御三家はもう少し先まで刀を持ち込むことができました。ただし、自分の控室までは持ち込めません

いをここに残していかなくてはなりませんでした。大手門に入れるのは、十万石以上の大名でも侍六人、草履取一人、大名の衣類などを入れている箱を持つ挟箱持二人、駕籠かき四人です。下乗橋からはさらに供の人数が減らされ、侍三人、草履取一人、挟箱持一人となります。注目すべきは、ここで駕籠かきが消えていることです。つまり大名も下乗橋の手前で駕籠から降り、そこから先は歩いて行かなければならなかったのです。大手三之門、中之門、中雀門を抜けたあと玄関に入れるのは大名一人



(図2) 本丸御殿略図

(左) 出典：『歴史群像』名城シリーズ7 江戸城 四海をしろしめす天下の府城』（学習研究社）1995年、93ページ、製作：平井聖

(右) 出典：深井雅海『江戸城—本丸御殿と幕府政治』（中公新書1945）2008年、11ページ

※2つの図は、南北の方角が異なります。

でした。

こうした非常に細かな決まり事によって、幕府は登城時から、大名に將軍家の臣下であることを実感させるよう工夫をしていたのです。

続いて、本丸御殿の構造について話をしたいと思います。本丸御殿は三つの空間に分かれています（図2）。「表」は儀式・政治空間、「奥」は將軍の生活空間、「大奥」はよく知られているように女性たちの生活空間です。それぞれの内部がどのようなになっているのか、説明します。

「表」の東側には玄関があり、大名はここから御殿の中に入り

ます。ただし老中以下諸役人は脇玄関から入ります。脇玄関は二か所あり、「奥」に勤務する役人は納戸口、「表」に勤務する役人は中之口から入ると決まっていました。

ここを入ると役職ごとに身なりを整えたりする下部屋があり、老中・若年寄は個室をもらっていたため、納戸口のことを老中口ともいったようです。

「表」の西側には三つの大きな部屋があります。黒書院は四部屋からなり、周りを入側で囲まれていて、約二〇〇畳の広さがあります。そして中庭があり、白書院があります。ここもやはり四部屋で入側に囲まれていて、三〇〇畳の広さがあります。そしてまた中庭があり、四九〇畳という非常に大きな空間の大広間があります。黒書院と白書院をつなぐ竹之廊下は、廊下といっても畳が敷いてあって六十四畳あります。白書院と大広間をつなぐ廊下は有名な松之廊下で、ここも九十畳の畳が敷いてあります。この黒書院、白書院、大広間で、さまざまな儀式・行事が行われました。そのことについては後ほどお話しします。

「奥」の入口は、御成廊下と時斗之間です。將軍は御成廊下を通過して黒書院、白書院、大広間に出てきて儀式や行事を催します。御成廊下の東側には時斗之間があり、その名前どおり時計が置いてあったようです。ここには時斗之間坊主が座って、「表」の役人が入らないよう見張りをしていました。その西隣には老中・若年寄の執務室である御用部屋が設けられています。

「奥」の西側は、將軍の生活空間です。將軍の居間であり、寢室であり、政務を見るところが御休息之間です。その南側には御座之間があり、ここはもととも居間でしたが、家綱の時代から

応接間になりました。だいたい一〇〇〇一二〇畳くらいの広さがあります。

「奥」の東側は、將軍の側近役人の部屋です。その中心が側衆談部屋そばしゅうだんじべやといって、御側御用取次おそばごようとりつぎの執務室です。御側御用取次は、当てはまるかどうかは別として今という官房長官のような役職です。「表」の長官が老中、「奥」の長官が御側御用取次で、「表」と「奥」は完全な男性社会でした。

最後は「大奥」です。「大奥」は女性社会ということで、銅堀あかがねで仕切られています。出入口は上御鈴廊下と下御鈴廊下の二か所あり、將軍は御休息之間から上御鈴廊下を通じて「大奥」に入ります。そのすぐ横に御小座敷という小さな部屋があり、將軍が女性と一緒に寝るときはここが使われました。

「大奥」の北側には將軍の正室である御台所みだいじょうの居室があり、この辺りの広い空間を御殿向ごてんむきといいます。ここには將軍や御台所に仕える女性家臣（奥女中）の詰所が設けられていました。さらに、東側には奥女中の住まいである長局ながつばねがあります。奥女中はかなりの人数がいたため、長局は非常に広い空間でした。

なお、「大奥」というと女性ばかりと考えがちですが、じつは將軍の正室・母親・娘といった女性家族の事務をとったり、警護をしたりする男性役人もいました。その男性役人の詰所が、広敷です。「大奥」は御殿向と長局と広敷の三つの空間で構成されていました。

## ◆格によって異なる御目見の仕組み

それでは、さまざまな儀式や行事が行われていた「表」の仕組み、機能について話を進めます。最初に、大名が儀式に参加するときの格式で重要な「殿席」と「官位」の説明をします。

大名の分類は、一般的には親藩・譜代・外様という分け方が知られていますが、これは明治以降に分類されたものです。江戸時代には、大名たちが江戸城に登城したときの控えの部屋で区別されていました。これを殿席といいます。

殿席は、大廊下、溜間、大広間、帝鑑間、柳間、雁間、菊間（正しくは菊間縁頼）の七つあり、天保六（一八三五）年当時二六六家あった大名はそのいずれかに所属していました。特に多いのは帝鑑間の六十三家、柳間の七十九家です。じつは江戸時代においては帝鑑間席の大名を譜代、柳間席の大名を外様と呼んでいました。ですから、当時は譜代・外様というのは限定された大名を指していたわけです。

殿席は幕府の役職とも関係していて、老中以下大番頭までの役職に就いていたのは帝鑑間、柳間、雁間、菊間の四席の大名のみです。なかでも雁間詰は半数近くが役職に登用されています。それだけ将軍に近い大名ということです。大廊下、溜間、大広間は大大名も多く、軍事力も高い大名であったため、こういう大名が政治権力を握る老中になると将軍家が危うくなることから、役職には任命しなかったものと思われれます。

殿席の位置と將軍家との関係についても見ておきましょう。一つ目は、松之廊下のそばにある大廊下です。ここは將軍家ゆかりの大名家に与えられた特別待遇の座席で、一番格の高い席です。部屋は二つあり、上の部屋が御三家、下の部屋が加賀の前田家の部屋です。二つ目は、黒書院のすぐそばにある溜間です。ここは溜詰と呼ばれていて、会津の松平家、高松の松平家、彦根の井伊家の詰所です。三つ目は大広間です。徳川一門と外様の大大名の殿席で、大広間の一角に席があります。四つ目は、白書院の中にある帝鑑間です。ここは古くからの譜代大名の席といわれています。五つ目は柳間で、白書院と大広間の間にある中庭の横に部屋があります。ここは五位の外様の席です。外様大名は大広間と柳間に分かれていて、柳間のほうが格の低い大名、大広間が格の高い大名です。六つ目の雁間は、黒書院と白書院の間にある中庭の横に位置します。そのすぐそばに七つ目の菊間があります。この二席は取り立てられた譜代大名の席といわれています。一般的な大名は、儀式や行事のとき以外は江戸城に登城しません。しかし、雁間と菊間は交代で日常的に登城しています。そのため、詰衆、詰衆並と呼ばれます。詰衆は城持ち大名、詰衆並は無城の大名です。先ほど言いましたように、雁間は半分近くが役職に登用される、將軍に近い大名です。大名の殿席はすべて黒書院、白書院、大広間の周りに設けられていて、儀式や行事に参加するときの控えの席となっています。

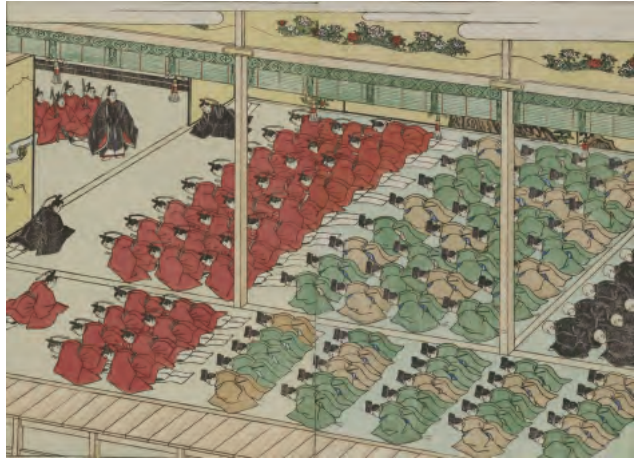
官位も、家格のもとになる重要なものです。幕府は官位によって大名を序列化していました。大名に与えられる官位で最も格が高いのは大納言です。大名は家格によってどこまで昇進できる

かが決められていて、これを極官ごっかんといいます。大納言が極官の大名、つまり大納言になれるのは尾張家と紀伊家のみです。中納言は水戸家のみ、宰相と呼ばれる参議は加賀の前田家のみです。長州の毛利家などの外様の大大名は国持大名と呼ばれ、極官は中将か少将です。これらの大名は、家督を継ぐと少将か侍従になります。例えば毛利家の場合は侍従になり、極官は少将です。侍従は老中と同一の官位なので、大大名は官位の面で優遇されていることがわかります。

官位というのは官職と位階の二つが一体化したもので、大納言から侍従までは官職で序列がつけられています。ただし、この人たちはもちろん、位ももっています。侍従の下しほんの四品というのは、従四位下という位のことです。その下の諸大夫は従五位下という位です。これらは位なので、それとは別に官職ももらいます。

では、この官位にそれぞれのくらの率で任命されていたかというところ、四品以上は全体の四分の一弱で、大部分は一番下の従五位下です。殿席で見ると大廊下、溜間、大広間は全員が四品以上で、ほとんどが侍従以上です。一方、帝鑑間、柳間、雁間、菊間は九割近くが諸大夫、従五位下です。このあと詳しく説明しますが、四品以上と従五位下とは儀式においても大きな違いがあります。

それではいよいよ殿席・官位をもとに、儀式がどのように行われていたのか、明らかにしたいと思います。まず年頭御礼について見ていきましょう。年始には、大名のうち徳川一門と譜代大名が一月一日、外様は二日に御目見をします。四品以上は独礼といって一人で御目見ができます。

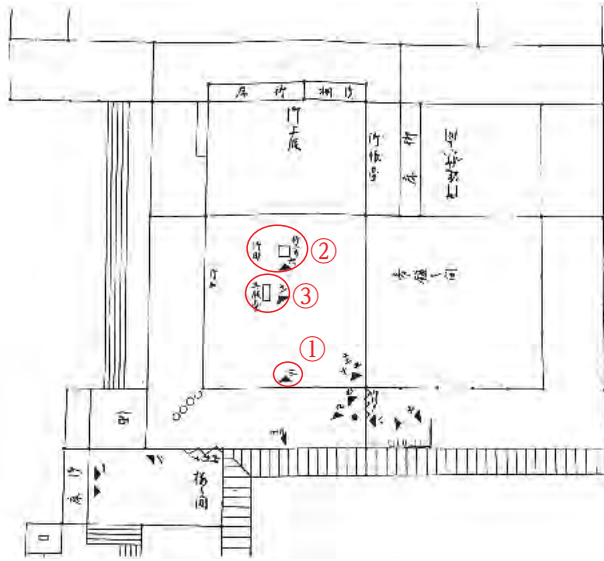


(図3)『徳川盛世録』立礼の謁見（東京都立中央図書館蔵）  
※ただし、この図は將軍宣下のときの立礼を示す。年頭御礼のときは衣服が異なる。

大名の大半を占める諸大夫、従五位下は立礼といって集団で御目見をします（図3）。

元日の独礼は、白書院で行われます。図4は尾張徳川家に伝わった資料で、儀式での動きを示した手本の一つです。將軍が上段に座り、大名は下段で御目見をします。老中は下段の外の入側（縁頬）、四つの丸印の辺りに座ります。若年寄はさらに外れた入側の端、四つの四角印の辺りに座ります。

年頭御礼では、將軍に太刀を献上します。といっても本物の太刀ではなく、木製の飾太刀かざりたちです。將軍からは盃さか、そして時服じふくが下賜かしされます。この三つの行為を行うにあたり、官位によって場所が決められていて、大納言か中納言の尾張家の場合、まず図4①の場所に座って御目見をします。最も官位が高い尾張家であっても下段の一番下で、將軍とはかなりの距離があります。この図には書かれていませんが、太刀は下段の上から三畳目、図4②の六と書かれた三角印の辺りに置かれていました。將軍に一番近づけるのは盃の下賜で、図4②の御三方と書かれているところに盃があり、六の三角印のところで下賜されます。それが



○御者中  
□若年寄衆  
●御太刀被賜之御老中被授所  
▲御返給之御老中此所江被相懸

(図4) 独礼の図(御三家の尾張家)

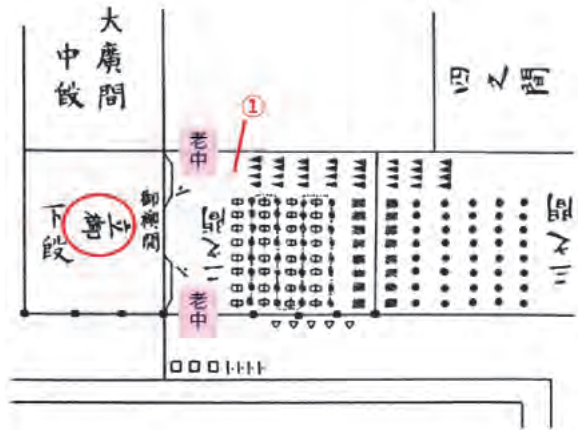
出典：深井雅海『江戸城御殿の構造と儀礼の研究—空間に示される権威と秩序』(吉川弘文館) 2021年、33ページ

終わると、時服の下賜です。図4-③の三疊目から四疊目にかけて縦に呉服台が置かれていて、十一の三角印のところで下賜されます。

このように献上・下賜の場所が官位の高低によって疊目ごとに細かく決められており、官位が低くなるに従い將軍から遠ざかります。独礼を行うことができる一番低い官位である四品は、下段の中に入らず、入側ですべてが行われます。

立礼は、大広間で行われます。34ページ図5を見てください。下段に將軍が立ち、二之間・三之間に太刀を前に置いた大名・旗本たちが並びます(図5-①)。下段と二之間の間は襖が閉じられていて、將軍が立つと左右にいる老中が襖を開け、御目見が行われます。言葉も発しなかったといわれています。それが終わると將軍は上段に座り、大名は三人ずつ下段

二日に行われる外様の御目見も、独礼と立礼があります。立礼は譜代の御目見と同じです。独礼は譜代が白書院で行われたのに対し、外様は大広間で行われました。白書院は上段と下段の二部屋ですが、大広間は上段・中段・下段の三部屋に分かれた九十二畳の空間です。外様の御目見は日にちをずらただけで



(図5) 立礼の図

出典：小野清『徳川制度史料』（六合館・林平次郎）  
1927年、「柳営行事」下巻12ページ

へ行って盃の下賜、時服の下賜を受けます。今も残る盃や時服を見ると、いずれも葵の紋章が付いています（図6-1と2）。時服を下賜されると左の肩にかけ、長い廊下を通って退室します。時服は重く、年をとっている人などは大変だったろうと思います。



(図6-2) 時服（新潟市歴史博物館蔵）



(図6-1) 御土器 古坂家旧蔵  
(徳川林政史研究所蔵)

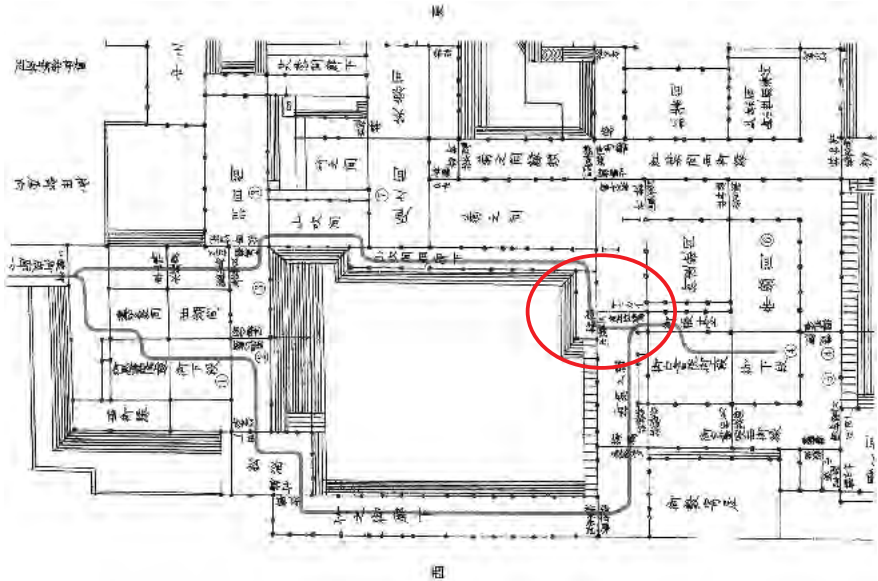
なく、将軍との距離も遠いということがわかります。

太刀の献上、盃の下賜、時服の下賜が行われるのは同じで、置き場所もやはり官位によって決まっています。侍従は下段の一番下に座り、下から二畳目に太刀を置きます。将軍は上段の中ほどに座っているので、下段の一番下からはおそらく十六、十七メートルの距離があったのではないかと推測します。

### ◆将軍との距離によって権威と秩序が保たれた

年一回の年頭御礼のほかに、月のうちの一日、十五日、二十八日に行われる御目見もあります。これを「月次御礼<sup>つきなみ</sup>」といいます。ただし、毎月必ず三日間行われたわけではなく、月によっては行われない日もあったようです。

月次は殿席ごとに御目見が行われるのが特徴です。その流れを見ていきましょう（36ページ図7）。将軍が御成廊下を出て黒書院の上段に座ると、格の高い大廊下席が黒書院下段の下から一畳目（図7-①）に座って独礼を行います。次に、溜間詰が黒書院下段の縁下から一畳目（図7-②）に四人くらい並んで御目見をします。それが終わると、将軍は黒書院下段に立ちます。そうすると今度は、黒書院の西湖間東縁頬（図7-③）に雁間詰が集団で座り、芙蓉間役人や中之間衆が羽目間（図7-④）に座って立礼を行います。雁間詰は大名、芙蓉間役人や中之間衆は旗本ですから、大名のほうが将軍に近い位置で御目見できることになります。



(図7) 月次のときの将軍の行動と謁見場所

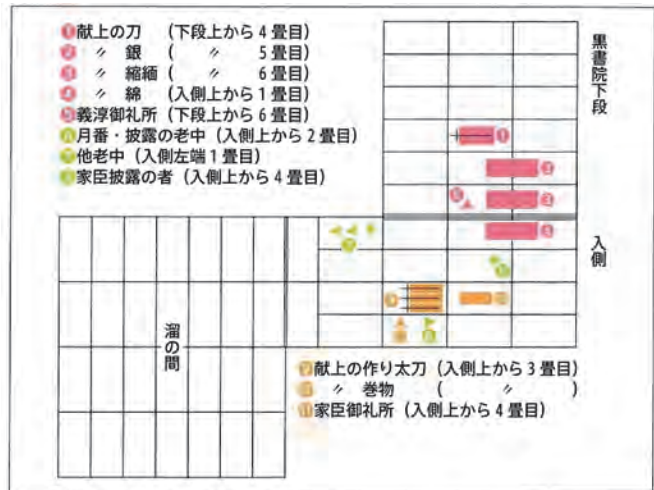
出典：深井雅海『江戸城御殿の構造と儀礼の研究—空間に示される権威と秩序』（吉川弘文館）2021年、181ページ

その次に、将軍は白書院に移動し上段に座ります。大広間席と帝鑑間席の侍従以上は白書院の下段（図7-④）、四品は縁頬（図7-④）に座り、独礼を行います。それが終わると帝鑑間席と柳間席の従五位下が、白書院下段の縁頬下から一畳目（図7-⑤）に五人ずつ並んで御目見をします。その後、諸番頭や諸役人が帝鑑間（図7-⑥）から紅葉間にかけてずらっと並んで立礼を行います。

そして最後は、将軍が山吹間細廊下を通って帰るときに、菊間縁頬詰の大名たちが雁間（図7-⑦）に座って通御の御目見が行われます。

続いて、儀式ではなく日常的な御目見についてもお話ししておきます。これは月次の御目見に合わせて行われるのが特

上する品物にも格が設けられていて、一番格が高い刀は下段の上から四畳目の真ん中、その次に銀、その次に縮緬、そして入側（縁頬）のところに綿が置かれています。本人は図8-⑤の位置に座ります。尾張家は格が高いので、家臣たちも御目見します。その場所や、献上する太刀と反物を置く位置も、家臣の格によって細かく決められています。



(図8) 徳川義淳家督相続御礼のときの御目見の図  
出典：深井雅海『刀剣と格付け—徳川將軍家と名工たち』  
(吉川弘文館) 2018年、74ページ、※一部変更

徴です。日記で見ると、享保十九（一七三四）年の場合でだいたい年間五三〇名以上の御目見が行われています。多いのは、大名が参勤交代をするときの参勤・暇の御目見と、役人の参上・暇の御目見です。格の低い役人の場合は、白書院の北にある納戸構で、通御の御目見になります（図7の丸印）。そのほかにも寺社の御目見、初めての御目見、役職・加増・官位の御目見、家督相続や隠居礼、婚姻・病後・歳暮礼などが御目見として行われます。

そのうちの一つ、家督相続の御目見の例が図8です。これは尾張八代目の当主・徳川義淳が家督相続で御目見したときの図です。將軍に献

最後に、老中の申し渡しについてお話しします。享保十九（一七三四）年の場合、老中は一一七一件の申し渡しを行っています。その内容として多いのは、跡目（家督相続）、拝領物、褒美下賜、旗本が最初に就職するときの番入、役職の任・免です。

申し渡しを行う部屋は、大きく四つの格に分類されます。一番格の高い白書院縁頬、黒書院溜、羽目間、雁間、芙蓉間で申し渡しを受けるのは、大名と布衣役以上です。布衣役とは、旗本の諸大夫役に次ぐ二番目の職階です。一般的な旗本は、その次に格の高い右筆部屋縁頬、菊間、菊間縁頬で申し渡しを受けます。そして御目見以下の御家人になると躰躰間と焼火間で申し渡しが行われ、一番格の低い檜間では陪臣、大名家来への申し渡しが行われます。格の高い部屋は、將軍の生活空間に近いところにあります。檜間は最も遠いところにあります。老中の申し渡しでも、將軍との距離によって格が決められているのです。

まとめると、格を設定する基準は將軍との距離であるということです。江戸城では將軍への謁見のときのみならず、日常的に行われる老中・若年寄による政治的行為の場でも、將軍との距離を意識させる部屋割りがなされていました。しかも、これが視覚化されていたことも重要です。このことが將軍の權威を高め、そして格を細かく設定することによって秩序を維持し、政治の安定がもたらされていたわけです。さらに付け加えると、江戸城御殿でのさまざまな儀礼は、將軍の恣意ではなく幕府の制度として行われました。そのことが、いわゆる「徳川の平和」を長く維持できた要因の一つではなかったかと考えます。



連続講演会第二回（令和五年十月十五日開催）

日光・上野東照宮の大工たち

― 中井正清・甲良宗広・鶴正村 ―

講師 波多野 純

## ◆神君家康と東照宮

東照宮といえば、極彩色と華やかな彫刻で飾られた日光が著名です。ここ台東区の上野公園にも東照宮があります。華やかな中に品格のある建築です。東照宮は、山王一実神道という仏教色の強い神道で、江戸幕府初代將軍徳川家康を神として祀っています。主導したのは、後に寛永寺を創建する天海てんかいです。その後、將軍家への恭順を示すために、全国の大名により、数百社が各地に建てられました。現存する国宝・重要文化財の東照宮は、青森県弘前市から鳥取県鳥取市まで、十五社あります。

東照宮の歴史を、それを建てた大工である中井正清、甲良宗広、鶴正村つるまさむららを絡めてお話しします。大坂の陣で豊臣家を滅ぼし、徳川の天下が訪れたことを見届けた家康は、翌元和げんな二（一六一六）年四月十七日、駿府で亡くなります。そこで、家康の信賴を一身に集めた中井正清という大工が、夜を徹して久能山に仮殿を建て、二日後に埋葬されます。さらに、一か月後の五月十七日に増上寺で葬儀が行われます。家康は、江戸入府の時点で、増上寺を菩提寺と定めていました。三河の大樹寺とのつながりです。葬儀前に、位牌を安置する安国殿が建てられました。大工は、鶴正村です。さらに、一年後の元和三（一六一七）年に、遺言に則って、日光山に改葬されます。日光の社殿（初代日光東照宮）を造ったのは、中井正清です。同年十二月には、久能山の仮殿も中井正清によって建て替えられ、本建築になります。その翌年には、江戸城紅葉山と浅草の浅草寺に



(図1) 世良田東照宮 拝殿 国重文

も東照宮が建てられます。

家康が亡くなって十一年後の寛永四（一六二七）年には、寛永寺の塔頭の一つである寒松院、ここはもと藤堂高虎の屋敷でしたが、そこに上野東照宮が建てられます。大工は、藤堂藩の小田源三郎です。家康は死の床にあって、高虎と天海に「三人がともに鎮まれる場所を造れ」と遺言し、高虎がその約束を守って建てたものです。

さらに、寛永十三（一六三六）年に三代将軍徳川家光の命により、日光東照宮の大造替だいぞうたいが行われます。このときの大工が甲良宗広です。江戸時代を通じて大棟梁を務める甲良家の最初の大きな仕事が、日光東照宮でした。

では、中井正清が建てた最初の日光東照宮の建物はどうなったかというと、ほとんどが取り壊されましたが、奥社の拝殿だけは、徳

川の故地である世良田（現在の群馬県太田市）に移築されます。この世良田東照宮拝殿は、現存する東照宮の中では最も古い建築ということになります（41ページ図1）。「小さき堂を建てよ」という家康の遺言にふさわしく、装飾も簡素で権威主義的な建築ではありません。中井正清が建て替えた本建築の久能山東照宮の社殿も、華やかに見えますが清楚な建物です。江戸時代初期の建築は、一見華やかに見えて、抑制が効いているのが特徴です。

上野東照宮も慶安四（一六五二）年四月十七日、家光によって大造替されます。大工は、鶴正村です。

### ◆日光・上野東照宮の建築

日光東照宮は、陽明門、唐門、本社（拝殿・石の間・本殿）、奥社などたくさんの建物群からなり、奥社には家康の遺骸を納める宝塔と拝殿があります。陽明門は特にすごい建物です（図2）。極彩色といわれるように色を豊富に使っているのですが、それを感じさせず、白と黒と金できれいに整理されているというのが、私の印象です。もっとも白の部分は江戸時代後期に塗られたもので、もとは櫓の生地でした。では、日光東照宮を造るために、どれくらいの人数の大工が必要だったのでしょうか。彫刻大工が二十九万人（元和の八十五倍）、平大工が三十八万人（五倍）といわれています。この人数は、人数×日数で計算したもので、例えば三十人というのは二人の大工が十五日間かかってやる仕事という意味です。彫刻大工が格段に増えているのも、寛永造替の特

質を示しています。

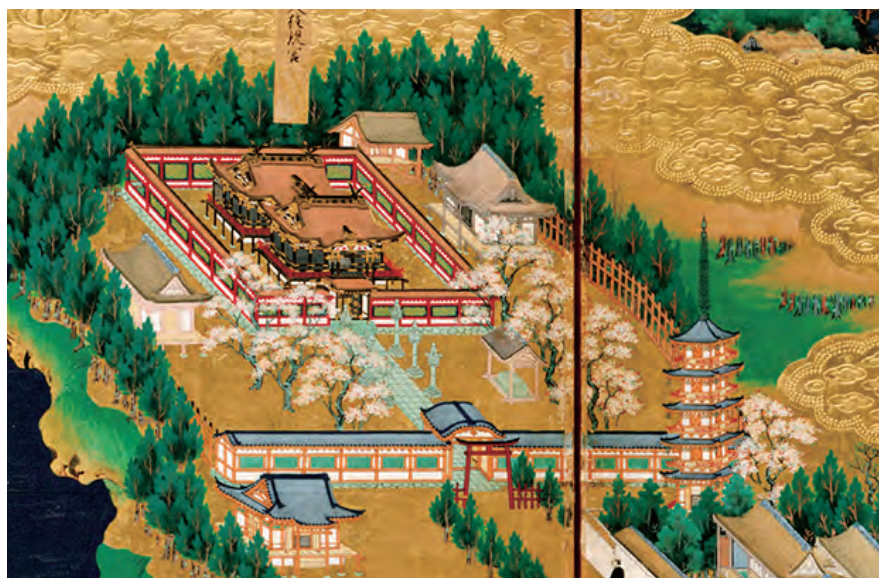
日光東照宮本社拝殿には、將軍着座の間と法親王着座の間という部屋が用意されています。壁は唐木による象嵌で、天井も格間に唐木の象嵌を嵌めた二重折上げ格天井という特別に格式の高い意匠です。日光東照宮の当時の見積書では、材木代の半分以上を唐木が占め、紫檀、黒檀、鉄刀木、チークなど最高級木材が輸入されています。

次に、上野東照宮の社殿についてです。上野東照宮は、前にお話したように寛永四（二六二七）年、藤堂高虎により建てられ、慶安四（一六五二）年、家光によって大造替されます。

最初の上野東照宮は、出光美術館所蔵の『江戸名所図屏風』（出光本）に描かれています。朱色の柱に白壁という、質素な社殿です。大



（図2）日光東照宮陽明門 国宝（日光東照宮）



(図3)『江戸図屏風』(歴博本) 右隻 上野東照宮(国立歴史民俗博物館蔵)

造替後の豪華な社殿は、国立歴史民俗博物館所蔵の『江戸図屏風』(歴博本)に描かれた姿と、唐門など一致しない部分があるものの、大変よく似ています(図3)。

上野東照宮は、内部も見事です(図4)。壁は狩野探幽かのうたんゆうの獅子図です。床はピカピカの漆塗りで、柱は漆を繰り返して塗り塗った上に金箔を貼っています。さらに長押なげしから上は彫刻が豊かで、彩色もされています。

日光東照宮と上野東照宮についてお話ししましたので、ここで二つの東照宮を比較してみたいと思います。日光東照宮のほうが十五年ほど前に建てられましたが、さほどの年代差ではありません。大きな違いは建築様式です。日光東照宮は禅宗様(唐様)を基本とし、上野東照宮は和様を基本としています。禅宗様は、鎌倉時代後期に禅宗とともに中国から伝えられた建



(図4) 上野東照宮拝殿内部 国重文（上野東照宮）

築様式で、緻密な細部意匠が日本人の好みに合い、定着しました。和様は、飛鳥奈良時代に中国から伝えられた建築様式を日本化したもので、鎌倉時代到大仏様と禅宗様が導入されたことに刺激され、革新的に変化しました。建仁寺流を名乗り、禅宗様を得意とした甲良宗広が日光東照宮を、四天王寺流を名乗り、和様を得意とした鶴正村が上野東照宮を担当しました。建築様式の違いによって、詰組つめぐみか墓股かぶこかなど、ディテールの部分に少しずつ違いが出ています。

#### ◆ 徳川将軍の霊廟―増上寺と寛永寺―

徳川幕府には、初代家康から十五代慶喜まで十五人の将軍がおり、それぞれに霊廟れいびょうや墓所が造られました。まず家康が日光に埋葬されます。二代秀忠は、菩提寺である増上寺の



(図5)『江戸図屏風』(歴博本) 左隻 増上寺台徳院靈廟 (国立歴史民俗博物館蔵)

台徳院靈廟に葬られます。三代家光は、天海との縁が深かったため寛永寺で法要を行い、敬愛していた家康が眠る日光の輪王寺大猷院靈廟に埋葬されます。四代家綱と五代綱吉は、いずれも寛永寺の嚴有院靈廟と常憲院靈廟に埋葬されます。しかし、これでは菩提寺としての増上寺の立場がありません。バランスをとるために、六代家宣いえのぶと七代家継いえつぐは増上寺の文昭院靈廟ぶんしょういんと有章院靈廟ゆうしょういんに埋葬されます。

八代吉宗は、幕府の財政再建のため靈廟建設を止め、自らもこれまでの靈廟に合祀されるように計られています。これらの結果、日光に家康と家光、増上寺と寛永寺に六人ずつが祀られました。最後の十五代慶喜は大正二(一九一三)年に亡くなり、谷中靈園に神道形式で埋葬されています。

『江戸図屏風』（歴博本）には、二代秀忠が埋葬されている増上寺の台徳院靈廟が描かれています（図5）。幕府が総力を挙げて造り、実務は甲良宗広が担いました。実際の建物は、一部を残して、昭和二十（一九四五）年五月の戦災で失われましたが、十分の一の模型が残りました。明治四十三（一九一〇）年に靈廟を実測して作った最高級の模型です。建築史家の古宇田実と彫刻家の高村光雲が監修し、ロンドンでの日英博覧会に展示されましたが、その後行方不明となりました。それを、東京大学大学院客員研究員のウイリアム・コールドレイク博士が発見し、日本に里帰りしました。現在は増上寺宝物展示室で公開しています。彩色まで正確で精度の高い模型ですので、ぜひ見てください。

三代家光の輪王寺大猷院靈廟を造った大工は、平内へいのうちまさかつ応勝です。平内家は和様が得意なのですが、この靈廟はほとんどが禅宗様です。江戸時代の大工は何でもこなせたと考えていいと思います。

### ◆江戸時代の大工と組織

大工とその組織の話に進みます。家康の時代、江戸幕府の中枢には、木原・鈴木という三河以来の譜代大工と、京から招いた中井正清という大工がいました。中井は法隆寺村の出身で、親の代から京で活躍した大工ですが、木原・鈴木を差し置いて、家康に信頼されていました。それは、技術的に優れていただけでなく、ゼネコンとしての能力が高かったからです。例えば駿府城が焼けた際も瞬時に駆けつけて、大量の大工を手配して短期間で再建しています。このようなゼネコ

ンとしてのプロデュース能力が、木原・鈴木とは比べものにならないレベルだったのだと思います。二代秀忠の時代になると、中井が京に戻り、それに代わって木原・鈴木が台頭し、幕府の建築工事の中核を担います。さらに、三代家光の時代になると、木原・鈴木は官僚的職務を担い、その下にいる甲良宗広、平内応勝、鶴正村など、技術的に優れた大工が台頭してきます。身分は木原・鈴木が上ですが、実質は実力のある大工に切り替わっていきます。

江戸幕府の建築組織は、建築担当の作事方さくじかた、修理（後に建築）担当の小普請方こふしんかた、土木担当の普請方ふしんかたという部署に分かれています。このうち作事方の組織は三代家光の時代に整備されました。作事方のトップは作事奉行で、大名の仕事です。今の国土交通大臣の立場ですから、技術職ではありません。作事奉行の下が技術職の最高位である大工頭、その下が実際の仕事のトップである大棟梁、さらにその下が大工棟梁となります。大工頭には、木原・鈴木と上方担当の中井がいました。

中井正清の父親の正吉まさよしは豊臣秀吉に可愛がられた棟梁司で、大坂城や方広寺大仏殿などを建てました。息子の正清も優秀だったのでしよう、江戸城天守、初代日光東照宮をはじめ江戸時代初期の重要な建築の多くを担当し、「一朝惣棟梁」とまで呼ばれています。正清はかなりの大酒呑みで、大言壮語、豪快な人物だったそうですが、その人柄を家康が好んだと伝えられています。

徳川家康は関ヶ原の戦いに勝利し、慶長八（一六〇三）年に將軍になります。家康は大坂城に残っていた豊臣秀頼に対して、たくさんの寺社の造営や修理を要求しました。ちょうどその頃、関西

で大地震があつて法隆寺も甚大な被害を受け、秀頼が修理を担います。この法隆寺の大修理を惣棟梁として担当したのが、中井正清です。現在も残っている法隆寺金堂軒先隅の龍の巻柱は、中井の修理によって取り付けられた部材です。法隆寺金堂の屋根は構造的に隅が脆弱なので、上の屋根と下の屋根の間に支え柱を立てる耐震補強がされています。

甲良宗広は、彫刻技量だけではなく、人格的にも優れていたそうです。三代家光の信頼が厚く、増上寺の山門は中井正清の配下で甲良が担当し、日光東照宮の大造替は大棟梁として任されています。

甲良家は明治まで続く家柄です。甲良家三代目宗賀の弟に甲良向念こうねんという人がいます。江戸城の御殿や大名屋敷の平面や彫刻の様相を丁寧に記した「甲良向念覚書」を残しました。これにより、明暦大火以前の江戸城や大名藩邸の様相がわかります。

現在の上野東照宮を造った鶴正村は、鶴家の二代目です。増上寺安国殿も造りました。初代の鶴正昭は紀州根来ねごろ（現在の和歌山県岩出市）出身の大工ですが、伊達政宗の大工として活躍し、大崎八幡宮や瑞巖寺などを造ります。やがて江戸へ進出し、彫刻の技量から「鶴亀（甲良家）」と称されます。

鶴正村の戒名は、「内匠院規矩準繩居士」です。「内匠」は大工、「規」はぶんまわし（コンパス）、「矩」はさしがね、「準」は水盛り、「繩」は墨縄。まさに大工のための戒名です。幕府の大棟梁である鶴家は大工として最高位なわけです。それなのに、生活苦から三代目正任のときに廃業し、

川舟役に転じてしまいます。幕府大棟梁はすごい身分だと思っていましたので、暮らしに困って技術を捨てるなんて、驚きでした。

### ◆左甚五郎と関東の彫刻大工

最後に世の中で一番有名な大工、左甚五郎の話をしします。彼の作品は、日光東照宮の「眠り猫」をはじめ、全国に分布しています。出身地や生没年もよくわかりません。「左」が姓なのか、「左利き」を指すのかも諸説があります。品のある酒呑みを「左利き」と言うのは、鑿<sup>のみ</sup>を持つ左手と「呑み手」の掛詞です。

日光東照宮の「眠り猫」は、奥社へ入る通用門の上にあります。陽明門手前の神厩<sup>しんきゅう</sup>には、「三猿<sup>さんざる</sup>」（図6）の彫刻があります。「見ざる・言わざる・聞かざる」が有名ですが、猿の彫刻は八面あり、生まれてから年老いていくまでの物語が人生の教訓として描かれています。上野東照宮唐門に彫られた「昇り龍・降り龍」（図7）も見事な彫刻です。こ



（図6）日光東照宮神厩 三猿 国重文（日光東照宮）



(図7) 上野東照宮唐門 昇り龍・降り龍 国重文(上野東照宮)

の龍は、毎夜不忍池しのばすのいけの水を飲みに行くという伝説があります。埼玉県にも安楽寺本堂(吉見町)の「野荒らしの虎」や、秩父神社拝殿(秩父市)の「子宝・子育ての虎」(52ページ図8)があります。いずれも左甚五郎作と説明に書いてあります。

左甚五郎の作品がいつ頃造られたかを調べると、安土桃山時代(十六世紀後半)から幕末(十九世紀中頃)までになります。しかしこれでは三〇〇年近く生きたことになってしまいます。建築史家・伊藤ていじの『日本の匠』には、左甚五郎は桃山時代に活躍した民衆の英雄で、荒唐無稽の物語が加えられるようになったのは安永年間(一七七二～一七八一年)以後のことらしい、と書かれています。

私はこう考えました。左甚五郎が実際にいたのかわなかったのかは、よくわからない。しかし、甚五郎のように腕一本で風を切って歩く大工に憧れを抱く風潮が庶民にはあった。江戸時代初期には、東照

宮をはじめとする権威ある建築を造り、彫刻の技も優れた甲良宗広や鶴正村が、甚五郎のモデルとして存在したのではないか。それが江戸時代中期から後期に、庶民が神社に参詣し、社殿の寄進までするようになると、それらの建築彫刻に携わる大工のなかでも技量に秀でた者が甚五郎と呼ばれるようになったのではないかと考えています。

江戸時代中・後期には、関東地方にたくさん彫刻大工の集団が誕生します。日光東照宮造営のために、ものすごい数の彫刻大工が集められ技術が向上し、その末裔たちが集団で活躍するようになったためです。

その一つが上州花輪村（現在の群馬県みどり市）の彫刻大工集団です。花輪村の石原吟八郎の作品である、享保九（一七二四）年の金鑽神社本殿（埼玉県本庄市）では比較的隙間の多い壁面彫刻です



（図8）秩父神社拝殿 子宝・子育ての虎（秩父神社）

が、延享元（一七四四）年の歡喜院聖天堂奥殿（国宝、埼玉県熊谷市）は、極彩色の壁面彫刻で埋め尽くされています。彼の弟子筋に当たる石原常八主信もとのぶが彫刻を担当した、天保四（一八三三）年の八宮神社本殿（埼玉県小川町）の彫刻はさらに細密になりますが、彩色はされていません。時代の流れとともに彫刻意匠も変化していくのだと思います。

私は昭和四十五（一九七〇）年に大学の建築学科を卒業しました。二十世紀モダニズムを基本とする建築教育を受けた世代です。モダニズムの特徴の一つは機能主義です。装飾的な無駄なものはいらないという考え方です。もう一つの特徴が国際様式です。つまり、機能に忠実な設計をすれば余計な装飾は付かないから、世界中で共通した建築デザインになるということです。歴史的な建築の評価もモダニズムに沿ってなされてきました。簡潔に無駄を省いたデザインの桂離宮は美しく、彫刻などの装飾にあふれ、金箔を多用した日光東照宮は俗悪である。私自身、この考えにどっぷりとはまってきました。まさに、正義と感じていました。しかし今は、地域の歴史や風俗、生活習慣を大切に、地域に根ざした建築材料で、伝統的な技術に則って建築を造ることが大切であると考えてようになりました。画一的な正義感で歴史的な建築を評価する、その乱暴さから脱皮するのに、多くの時間を費やしました。

東照宮は、まさに無駄な建築の典型です。幕府の屋台骨を揺るがするような巨費を投じ、技術の結晶として誕生しました。しかし無駄と考える中に、大工の情熱や技術の錬磨・蓄積など、大切なものが凝縮していると感じ、今では大好きな建築です。





連続講演会第三回（令和五年十一月三日開催）

## 大奥の御用商人

講師  
畑  
尚子

## ◆相手によって区別されていた御用商人

大奥の御用商人についてお話をさせていただきます。現在も皇室や王室の御用達ごようたしという言葉に耳に思うと思います。この言葉は江戸時代からあり、御用商人のことを御用達と言い換えることもできます。ただ御用達という言葉には職人や町人も含まれますので、今回は商人に限定して御用商人という言い方になっています。

御用商人とは、幕府・諸大名家・武家、朝廷・公家、社寺といった特権階級に専属的に出入りし、御用をうかがって品物を納めることを許された商人のことです。御用商人になれば、継続的に仕事を得ることができます。幕府の御用商人は幕府からお金が出ますので、商人としては御用商人の地位を得たいというのは至極当然のことです。とはいえ、御用商人になれば必ずしも安泰というわけではなく、誰もが狙っている地位なので、追い落とされる心配もあります。

一口に幕府の御用商人といっても、さまざまに区別されています。江戸城には本丸御殿のほかにしのまるに西丸御殿、二丸御殿にのまるなどがあり、御殿ごとに御用商人が存在します。本丸には將軍とその正室である御台みだい、西丸には將軍の世継ぎである將軍世子せいし、あるいは大御所とその夫人がいます。本丸の御用商人はそのまま西丸の御用商人にもなれるかというところではなく、改めて西丸の御用商人に任命されないとダメです。

本丸御殿の中でも表おもて、つまり將軍や表の年中行事などの御用を受ける商人と、大奥の御用を



(図1)『江戸錦 長局』(東京都立中央図書館蔵)

受ける商人に分かれます。こちらでも將軍の御用を受けているからといって、必ずしも御台の御用を受けられるわけはありません。

ところで、ここまでのお話は従来から知られていたことです。このたび私が新たに発見したことを付け加えさせていただきます。それは、場所で御用が分かれるだけでなく、常の御用(常に発生する御用)と臨時御用(臨時に発生する御用)があるということです。さらにそこに合わせて、御上御用と御次御用という区別があることもわかりました。

大奥では、將軍家族の御用を受けるのが御上御用です。また大奥には女中たちが暮らす長局(図1)という場所があるのですが、その女中たちに必要な衣装や道具を納めるのが、御次御用です。要するに、相手が上々方<sup>うえうえかた</sup>か女中かでも、御用商人は区別されていたのです。また、表の場合は、臨時御用のことを御次御用と呼んでいます。

以上を頭に入れていただいたうえで、三井越後屋と道具商山田屋という二つの御用商人を紹介したいと思います。

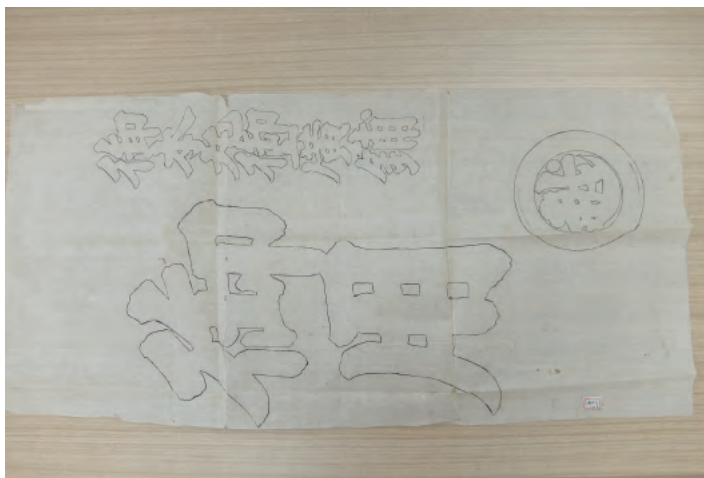
## ◆大奥の御上御用になるのに苦心した三井越後屋

最初に三井越後屋を紹介します（図2）。三井越後屋は近代に三井財閥となり、三越デパートや三井住友銀行などもその流れを汲む企業として知られています。近代の財閥は江戸時代でも大店でしたが、三井越後屋はどちらかというと新興商人で、当初は幕府の御用を受けていませんでした。

幕府の御用を受けていたのは、尾形光琳おがたこうりんの祖父・宗伯そうはくの代に栄えた「雁金屋かりがねや」という京都の呉服商です。浅井三姉妹あざいもこの顧客で、三女のお江ごうが二代将軍秀忠に嫁いで江戸城大奥に入ってからも臍肩ひいきにしていたため、秀忠や家康の御用も雁金屋に頼んでいました。ほかには茶屋四郎次郎や後藤縫殿助ぬいどのすけといった、三河時代から家康に仕えていた商人たちが幕府に重用され、近世初期の御用商人になっていました。



（図2）『東都名所駿河町之図』（国立国会図書館蔵）



(図3)『御本丸御廣鋪御用』のぼりの下書き(三井文庫蔵)

三井家が扱っていたのは呉服物で、最初に御用を受けたのは表の御上御用、つまり將軍の御用です。貞享四(一六八七)年、五代將軍綱吉の時代、側用人であつた牧野成貞なりさだの口利きで幕府の御用商人となり、「呉服部門により納戸御用引き受け」が始まりました。これは將軍が大名に下賜する時服を扱うはらいがたおんど、弘方御納戸、將軍の衣装そのものを扱うもとかたおんど元方御納戸の二つの御用を意味します。

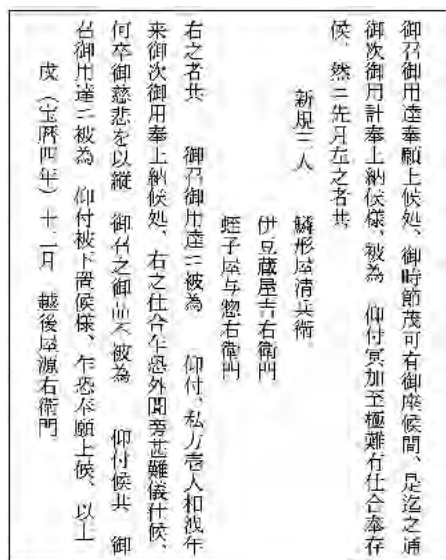
元禄三(一六九〇)年からは、金融業でも御用商人となりました。十四代將軍家茂いえもちの上洛時には、幕府の公金を預かつて在京中の支払いをしています。官軍が力を持つと、官軍にも資金援助をして、三井越後屋はうまく明治維新を渡っていきます。

越のマークが付いた「御本丸御廣鋪御用」と書かれたのぼりの下書きが残っています(図3)。御廣鋪(御広敷)とは大奥の中にある男性役人がある場所で、御広敷御用イコール大奥御用です。三井越後屋は大奥御用として、こののぼりを掲げて京都から江戸へ呉服物を運んでいたのです。

三井越後屋が大奥でまず受けたのは御次御用ですが、具体的にいつから御次御用が始まったのかは不明です。ただ、八代將軍吉宗の時代の史料には、当時西丸にいた次期將軍家重大納言のお付つきの女中の御用を受けていたこと、二丸に住んでいた六代將軍家宣の正室・天英院てんえいいんの臨時の御用と、その女中の御用を受けていたことが記された史料があります。天英院が二丸に住んでいたのは享保十六（一七三二）年から寛保元（一七四一）年なので、この史料はその間の記録といえます。

御次御用商人だった三井越後屋が次に目指したのは、大奥での御上御用です。御上御用の中でも、呉服物に関しては「御召御用」おめしと史料には書かれています。大奥における御召御用は、御殿向にいる將軍の家族の御用ということになります。なお、御殿向には奥女中が勤務する右筆部屋があります。右筆という役職の奥女中が手紙を書いたり書類を作成したりするのですが、ここで使用する紙や筆は果たして御上御用なのか御次御用なのか、そのあたりはまだわかっていません。

三井越後屋が大奥の御召御用商人になったのは意外と遅く、宝暦五（一七五五）年のことでした。なぜそれまでなれなかったのかというと、大奥に主あるじの女性がいなかったからです。七代將軍家継は幼くして亡くなっています。八代將軍吉宗は紀州藩主だったときに正室が亡くなり、その後再婚はしていません。九代將軍家重も結婚して二年で正室を亡くしてから再婚していません。御台がないため、そもそも本丸大奥での御上御用は発生しなかったのです。天英院は六代將軍の正室ですが、どういう理由なのか、三井越後屋は御上御用にはなっていません。



(図4)『御簾中様御召御用願書』宝暦4年12月三井越後屋の嘆願の記録(三井文庫蔵)

こうした経緯があり、十代将軍家治が正室を迎えることになると、商人たちは色めき立ちました。御用獲得のチャンスと、すべての商人が動きます。そして三井越後屋は宝暦五(一七五五)年十二月、「御簾中様御召御用達」となります。この御簾中様は、家治の正室となる五十宮です。家治はまだ御世継ぎのため、五十宮は御台ではなく御簾中ということ

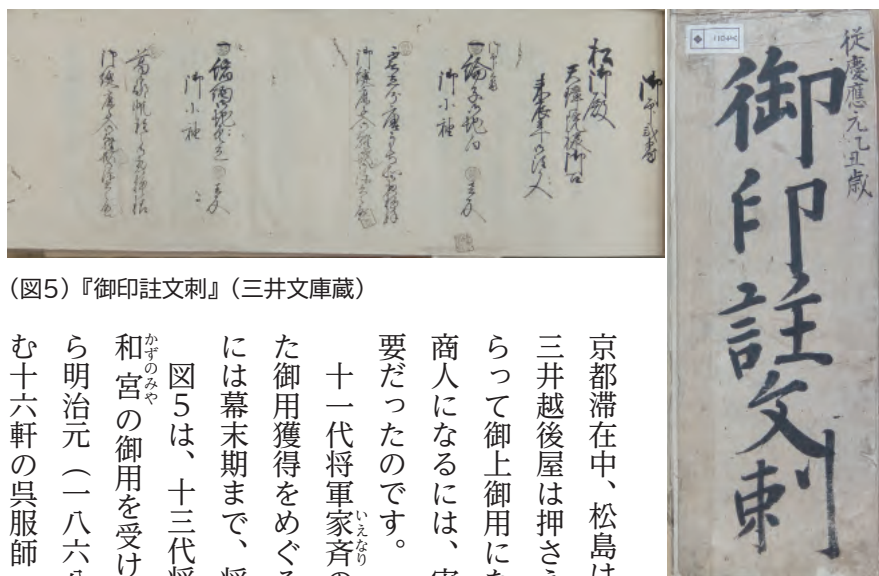
さてここで注目していただきたいのが、ある矛盾です。家治と五十宮が正式に結婚するのは宝暦四(一七五四)年十二月です。この時点で大奥の御上御用が発生します。にもかかわらず、三井越後屋が御上御用になったのは一年後の宝暦五(一七五五)年です。これは一体どういうことでしょうか。

じつは宝暦四(一七五四)年十二月、鱗形屋・伊豆蔵屋・蛭子屋の三家が新規に御召御用商人になったのに、その選に漏れた三井越後屋が、「品物を納品しなくてもいいから、名前だけでも御召御用達に加えてください」とお願いしている記録が残っています(図4)。おそらく何か失敗を犯したのでしょうか。これからその失敗を推察してみたいと思います。

家治との婚姻が決まった五十宮が京都から江戸へ来ることになる、京都を本拠地とする三井越後屋は御用を獲得すべく、五十宮周辺に攻勢をかけます。永田甚三郎という人物を仲介に、五十宮に人形を贈ったり、五十宮の乳母めのとのやすと御付女中にも呉服を贈ったりしました。特にやすの兄である藤木飛驒守ひだのかみへの攻勢はすごかったようで、飛驒守が永田甚三郎に送った手紙には「何度も断つたのにまた来たのか」といった内容が記されています。結局、飛驒守は金三〇〇〇疋ひきを受け取っています。五十宮に従い江戸城大奥に入った西洞院家にしのだういんのとせ、平松家のかせにも贈り物をしています。贈り物には三井越後屋からであることがわかるよう、三越のマークが付けられています。

ところが三井越後屋が唯一、攻勢をかけ漏らした場所があります。それは九代將軍および十代將軍の時代に大奥で最も力を持った松島の実家です。松島は桜井家という公家の出で、九代將軍家重の正室となり早くに亡くなった比宮なみのみやに付いて江戸城に入り、その後、家重付きになった人です。三井越後屋は御次御用ですでに松島との付き合いがあったため、里である桜井家には攻勢をかけなくてよいと判断したのです。しかしライバルたちは皆、桜井家にも贈り物をしていました。

寛延二（一七四九）年、松島は五十宮のお迎えに京都へ行き、江戸にお連れするという大役を担っています。その際、伊勢参りに立ち寄ったり、京都に一か月ほど滞在したりして京都見物もしています。大奥に入った女中は滅多なことでは江戸城の外に出られないと思うかもしれませんが、松島はこのように姫宮のお迎えで旅行をしていたことがわかっています。



(図5)『御印註文刺』(三井文庫蔵)

三井越後屋は、行く先々で松島を接待しています。京都滞在中も、泉涌寺せんいうじと養源院ようげんいんに参詣したいという松島一行のために、急きよ食べ物や酒を手配しています。そこまでのたのになぜ、松島の実家の桜井家には気が回らなかったのでしょうか。

京都滞在中、松島は当然、実家にも行っているはず。いずれにせよ、三井越後屋は押さえるべきところを間違えたために、一年間お預けをくらって御上御用になれなかったのではないかと想像します。大奥の御用商人になるには、実質上の決定権を持つ奥女中に取り入るかが重要だったのです。

十一代将軍家斉いえなりの時代になると、呉服の御用商人は固定化し、こうした御用獲得をめぐる争いは起こらなくなりました。三井越後屋は最終的には幕末期まで、將軍の御用の御用を受けています。

図5は、十三代将軍家定の正室・天璋院てんしょういんと、十四代将軍家茂の正室・和宮かずのみやの御用を受けた記録が記された帳面です。慶応元(一八六五)年から明治元(一八六八)年の史料で、二八七品目の注文を三井越後屋を含む十六軒の呉服師一統で請け負い、配分して制作し、連帯責任で納めて

いたことが書かれています。ここには「綸子御地白 御小袖 雲立分唐うちわ御惣模様 御縫鹿子入」とありますが、その続きの説明から、模様が描かれた雛形帳ひながたを添えて注文していたようです。

### ◆御次御用で成功を収めた山田屋

続いて道具商の山田屋について見ていきます。三井越後屋が大企業だとしたら、山田屋は中企業です。山田屋は大奥の御次御用商人で、決して御上御用商人になろうなどという野心は持っていませんでした。

山田屋の初代は、近江から出てきて四谷塩町一丁目で道具商を始めます。道具というのは、美術館などで見られるような漆工芸品が中心です。ただ山田屋は、漆工芸品に限らず、いろいろなものを扱っていたようです。初期の頃も大名家などに品物を納めていましたが、きちんと鑑札かんさつをもらって正式に御用商人の関係を結んでいたかどうかははっきりしません。

三代目の当主長珍ながよしは、竹姫の御守殿ごしゅでんに奉公していたとよという女性を妻にします。竹姫は五代將軍綱吉の養女で、八代將軍吉宗の時代に薩摩藩島津家に興入れこししました。御守殿というのは將軍姫君の御殿のことです。姫君が江戸城大奥から五十人ほどの女中を連れて御守殿に入っていくわけですが、この女中たちは大名家へ行っても雇い主は幕府のみです。つまり、とよは竹姫に仕えていた幕府の女中ということで、この関係が後々、山田屋を助けていくことになります。三井越後屋のような大企業ではない商人は、江戸城大奥や御殿に奉公している女性を妻にするとい



(図6)『狂歌畫像作者部類』山田早苗  
(黒田徳雅)肖像(国文学研究資料館蔵)

う形で商売を広げていきました。

宝暦十(一七六〇)年、四代目知眞ともさねの代

に、山田屋はトラブルに巻き込まれます。

当時は大名家や旗本などから売りに出された道具を買い取って修復し、また売るということをしていました。ある時、仲間の商人の手代てだいから「掘り出し物がある」と持ちかけられて購入したところ、その手代が山田屋の支払った代金を自分の懐ふところ

に入れてしまいます。それが見つかり、山田屋も加担して騙し取ったのではないかという嫌疑をかけられ、財産没収、知眞は江戸を追放されました。

急ぎよ弟の喜雅よしまさが跡を継いだものの、信用は失墜して大変でした。そこで母であるとよが奮闘

し、竹姫御守殿の御用達になることができます。また、とよは一橋家に奉公している女性とも関わりがあり、その伝手つてで一橋家の御用も受けます。経緯は不明ですが、その後、江戸城本丸の御用も受けるようになります。山田屋は御次御用なので、いずれも女中たちの御用ということです。

喜雅の息子は武士になることを望んだため、六代目として当主の座についたのは知眞の息子の徳雅のりまさです(図6)。黒田庄左衛門徳雅という人物で、寛政七(一七九五)年に二十三歳で叔父の

店へ入り、翌八（一七九六）年に家督を継ぎました。徳雅は最も山田屋を大きくした人で、四谷の西念寺さいねんじにある黒田家の墓に法名が刻まれています。

では、山田屋の具体的な仕事を見ていきましょう。徳雅が店に入った頃は、江戸城本丸大奥、尾州・紀州・因州の奥の御次御用商人として品物を納めています。尾州・紀州はそれぞれ尾張と紀伊の徳川御三家、因州は鳥取藩池田家です。じつは三代目の妻とよの実家は岡崎屋という商人で、尾張徳川家の御用達です。その伝手で御三家からも御用を受けられたわけですから、三代目かとよと結婚したことで山田屋はかなり大きな利益を得たことになります。

これだけ受ければ、中堅企業としては十分ではないかと思えます。しかし奥女中はかなりの人数がいるうえ、職制の高い奥女中の御用をたくさん受ければ、さらなる商売拡大が望めます。そこで徳雅は、まず本丸大奥の中での御用の拡大に努めました。その際頼ったのが、ねんという女性です。ねんは叔父（養父）である喜雅の三番目の妻の妹、徳雅の養母の妹に当たります。十一代将軍家斉の正室に仕えていたねんの功績により、寛政年間にはたくさんのお金を御用を受けることができました。ねんが亡くなると、徳雅は「厚恩は申し尽くしがたき」「商売の世話をして、御殿中へ取り次ぎを親切になし給えり。養母の妹にて予が恩人なりし大切の御人」「暮らし方よろしく成り候は御ねん殿のおかげ故と存ずる」と、惜しめない賛辞を贈っています。

ねんが具体的に何をしたかという点、大きく三つあります。一つは、御錠口おじょうぐちという役職にあり後に御客応答おきやくあうたに昇格する、女中の中でも職制の高い梅崎という人物に口利きしました。この梅崎



(図7)『絵本吾妻扶[1]』屋敷内宝引きの図（国立国会図書館蔵）

一式の御用もたくさん受けるようになります。

三つ目は、十二代將軍家慶が西丸へ行った寛政九（一七九七）年。ねんが素早く動き、西丸福

が取り持ってくれたのが、家斉の側室であるお万、お楽、お歌、お登勢、お蝶といった中臈たちです。側室たちに懷妊・着帯があると、山田屋は道具商でありながら金の松竹梅の屏風まで請け負って用意しています。次第に中臈たちから直接御用を受けるようになり、お万からは文台や硯箱など、高額な御用も受けています。史料に残る大名が使用していた硯箱から推測するに、お万が注文したものもおそらくかなりの高級品であったことがうかがえます。側室たちと結びつきができたことで、山田屋は家斉の子女縁組先ともつながることができました。

二つ目は、ご存じの方も多いかもしれませんが、家斉には子どもがたくさん生まれました。子どもが誕生するたびに、女中が新規採用されます。山田屋はねんの計らいで、新たに奥女中になる人たちの召出し道具

引御用を受けています。福引御用とは、正月にこよりのようなものを引き、そこに書かれている番号によって御殿の主から景品をいただくという行事の景品を用意する御用のことです（67ページ図7）。

家斉が一橋家にいる頃から守役だった岩田という人物が、とよと親しかった関係で、山田屋は岩田が本丸大奥の福引御用担当に任命されてから七年ほど、この御用も受けています。さらに、寛政元（一七八九）年にお万の娘・淑姫（ひでひめ）が誕生すると、岩田が守役となったため、山田屋は淑姫の福引御用も受けています。

山田屋はあくまでも御次御用商人です。ところが、こっそり御上御用を受けていたという記録もあります。鳥取藩池田家では馴染みの奥女中が姫君の御用を回しています。一橋家に至っては、家斉の両親にあたる治済（はるさだ）とお富の御用として硯箱・床置物・香炉・卓などを用意しています。家斉の正室・寔子（ただこ）からも内々に御用を回してもらい、鼻紙台二十両余りの品を納めています。

さらにもう一つ、山田屋が御用の拡大を図ったのが、姫君方が輿入れして大名家に入ると発生する、姫君の御守殿御用です。淑姫が尾張徳川家に輿入れする際、山田屋は「どうぞうちで引き受けさせてください」と申請し、結果的に御用を受けることができています。

將軍の姫君の輿入れが決まると、お付の上臈（じやうろう）・小上臈（こじやうろう）となる公家の女性が江戸（げいこう）に下向することになります。正親町家（おうぎまち）のやをが淑姫の小上臈となるべく、京都から江戸へ下向する際の召出し道具一式の御用も、山田屋が受けています。扱ったものを一部抜粋すると、京都から江戸に来る

ための輿（駕籠）、大奥の食事で用いる膳・碗・戸棚・鍋・味噌壺など。塗り物から焼き物、大きいものから小さいものまで、すべて調達しています。

家斉の次女・峯姫<sup>みねひめ</sup>が水戸へ輿入れする際も、山田屋は御用を願い出て、めでたく獲得しています。しかしそれ以降、山田屋は一切御用を願っていません。もう十分受けたので、これ以上の欲は出さないということです。

徳雅以降、十分な蓄えを得た山田屋は裕福に暮らします。徳雅は二回も伊勢詣へ行っていますし、泥棒に入られて一〇〇両ほど盗まれていることから、それだけ裕福な家であることがわかります。幕府の大奥の御用商人になると、安泰に生活していけるということがよくわかる事例だと思っています。





連続講演会第四回（令和五年十二月十六日開催）

## 家康と天海

講師 浦井 正明

## ◆ 出会う前から接点のあった家康と天海

寛永寺は、慈眼大師天海大僧正（じげんだいしてんかいだいそうじょう）（図1）によって創設された、天台宗のお寺です。天海大僧正は徳川家康・秀忠・家光の三代にわたる將軍の帰依を受け、徳川幕府の安泰と万民の平安を祈願するため、寛永二（一六二五）年、上野の台地に寛永寺を建立しました。本日は、徳川家康と天海を語るうえで最も重要な事柄である、家康が亡くなったあとに東照大権現（とうしょうだいこんげん）として祀られることになったいきさつについてお話します。その前に、家康と天海は生前どのような接点を持っていたのかということにも触れておこうと思います。



（図1）慈眼大師像 都重文（本覚院蔵）

家康が天海の存在を知ったのは、文禄四（一五九五）年頃だろうと推測します。その根拠は、大徳寺の住職だった沢庵宗彭（たくあんそうほう）が、南禅寺金地院の住職であり家康のもとで宗教政策や外交問題を担当していた以心崇伝（いしんすうでん）に宛てた手紙にあります。

関ヶ原の合戦のとき、つまり慶長五（一六〇〇）年に、崇伝が茶臼山の陣中にいる家康のところへ馳せ参じている際、沢庵が出した手紙の一説に天海の話が出てくるのです。そこには「僧正（天海のこと）は今、日光に行っている。お年がお年なので心配だ」と、当時六十歳になろうとしている天海の身を案じる内容が記されています。これは、慶長五年の時点で沢庵と崇伝と天海、それに家康がすでに知り合いであったことを証明する非常に貴重な手紙といえます。

また、元龜<sup>げんき</sup>二（一五七二）年の織田信長による比叡山延暦寺の焼き討ち後、疲弊していた比叡山を再興するよう家康が天海に依頼したこともわかっています。関ヶ原の合戦の際に天海が日光に行っているということは、比叡山の再興が済んで帰ってきたあと、家康が天海に日光山を治めるよう依頼したということです。比叡山の再興に行ったのは関ヶ原の合戦の少なくとも五年くらい前と考えると、文禄四（一五九五）年頃には家康は天海の存在を知っていたことになります。

ただ、この時点ではまだ家康と天海は対面していません。さまざまな資料から考察すると、家康と天海が実際に会ったのは関ヶ原の合戦から八年後の慶長十三（一六〇八）年と考えるのが妥当です。年次は記されていませんが、このとき家康が言ったとされる「相見ることの遅<sup>おそ</sup>きを恨む（もっと早く会いたかった）」という言葉が残っています。

それから家康と天海は、大変密接に交際するようになります。家康の天海に対する信頼はとも深く、二人が実際に会ってから家康が亡くなるまでのわずか八年の間で、家康は天海とじつにさまざまなことを話し合っています。



（図2）駿府城公園に建つ鷹狩りに興じる徳川家康の銅像  
写真提供：静岡市広報課オープンデータ  
「写真データ（駿府城公園）」

このあとお話ししますが、家康は遺言を残す際、側近中の側近である本多正純と金地院崇伝の二人とともに天海も呼んでいます。もともと浄土宗の檀家<sup>だんか</sup>として生まれた家康が、天台宗の天海に大事な遺言を伝えたことから、家康がいかに天海のことを信頼していたかがうかがえます。

### ◆家康を大権現として祀るべく天海が尽力

では、家康が亡くなり東照大権現の神号で祀られることになった経緯について、話を進めます。

家康の具合が悪くなったのは元和二（一六一六）年一月二十一日、出城のあった静岡県・田中へ鷹狩りに行ったときのことです（図2）。家康のところに出入りしていた商人の茶屋四郎次郎が揚げた鯉の天ぷらがおいしくて食べ

すぎたことが原因といわれてきましたが、それは俗説で、胃がんを発病したのだろうというのが近年の歴史医学者たちの唱える説です。

そのときは家康に付いていた侍医の片山宗哲が持参した薬箱から調査した薬を飲ませ、家康は体調が回復して再び鷹狩りをしながら翌二十二日に駿府城（静岡県静岡市）に帰ってきたという記録が残っています。ところが、その後の家康の病状は一進一退でした。

徳川二代将軍となる秀忠が江戸から駆けつけるなど、いろいろな人が見舞いに訪れる中で、天海が家康を初めて見舞ったのは三月四日です。金地院崇伝の『ほんこうくし本光国師日記』には、江戸の北院（喜多院）にいた天海に崇伝が手紙を出し、「家康公が病気だから早く来るよう伝えたがなかなか来ない。三月四日になってようやくやって来た」と書かれています。家康は天海には直接言わなかったものの、天海が帰ったあと「今ごろ来た」と怒っていたとも記されています。それでも家康は四月二日に遺言を伝えるべく、金地院崇伝、本多正純、天海の三人を枕元に呼びます。見舞いに来るのが遅いことを怒っていたとはいえ、天海への信頼はそれほど揺るぎないものだったのです。

その席で、家康は「躰（遺体）を久能（現在の静岡市・久能山東照宮）に納め、葬礼を増上寺にて行い、位牌を大樹寺に納め、一周忌後日光に小さき堂を建て勸請せよ、関八州の鎮守とならん」と遺言しています。一周忌後に勸請せよというのは、遺体を移すという意味ではなく、神様としての分霊を祀りなさいという意味です。「日光に小さなお堂を建てて分霊を祀ってくれたら、

自分は江戸を中心とした関東八か国の鎮守となろう」と家康は伝えたのです。

そして四月十七日に家康は薨去しうきよしたと発表されます。しかし、私は家康が息を引き取ったのは、本当は十五日ではないかと考えています。なぜなら、豊臣秀吉を祀る豊国廟の社僧で、唯一神道という神道を標榜する神龍院しんりゆういん梵舜はんしんを、秀忠が「家康の葬式の方法を聞きたい」と言って十五日に呼んだことが記録に残っているのです。それが十五日の朝になって突然、梵舜のところへ「家康公は大変元氣になられたので、葬式の話はやめにする」と通達が来たことが、金地院崇伝の日記に記されています。おかしいと思いませんか？ 十七日に亡くなったと発表される人が突然元氣になるのでしょうか。その後、翌十六日に秀忠は再び「急いで葬式の話聞きたい」と言って梵舜を呼び、梵舜は駿府城へ出向きます。おそらく家康が十五日に亡くなったため、ゴタゴタしているときに葬式の話に來られても困るということだったん取りやめにし、翌十六日に改めて梵舜を呼んだというのが本当のところではないかと推察します。

とはいえ、公には家康は元和二（一六一六）年四月十七日に七十五歳で薨去したということになっていますから、そういうことにして話を続けます。四月十七日の夜は雨が降っていました。そんな中、遺言どおり、家康の遺体を久能山の山上へ運ぶようにという命令が出ます。駿府城から久能山までは結構な距離があります。当時は火葬しないので、遺体をそのまま担いで上がらなければなりません。とどこころ土留めがしてある程度で、階段もなければ舗装もされていない細い山道です。そんな道をなぜ雨の中、急いで遺体を担いで上がらなくてはならなかったのでしょうか。



(図3) 久能山東照宮 御社殿（側面）国宝

唯一の理由は、家康を神様にしたかったからです。記録には「家康は死んで直ちに神に祝われた」と書いてあります。家康が亡くなったことを公表したとき、もし駿府城に遺骸があることを外部の人間が認識してしまったら神様になりきれないと捉えられてしまいます。亡くなってすぐに神になったはずの家康の遺骸が駿府城にあつては困るのです。

その証拠に、夜中のうちに家康の遺骸は駿府城の頂上に持ち上げて、直ちに上り口を閉ざし、張り番を置いて誰も近づけないようにしています。神様になったのだから葬式はいらないという考えから、家康の遺言であった増上寺での葬礼は行われませんでした。神に祝われたのだから、大名をはじめ一般からの香典も一切受け取らないというのが、幕府の言い分でした。

こうして久能山の山上に運ばれた家康の遺骸は、十九日の夜に梵舜が音頭をとり、唯一神道の神式で埋葬されました。その地に創建されたのが、現在の久能山東照宮の御社です(77ページ図3)。唯一神道で埋葬された家康は、そのままいくと秀吉と同じ明神号で祀られることになります。ここで異を唱えたのが天海です。天海は、「家康公は生前、山王一実神道で祀ってくれと私に遺言された。それを無視して唯一神道で埋葬し、しかも豊臣秀吉を祀る豊国廟の社僧である梵舜が主催するなど、甚だしい間違いだ」と主張したのです。

山王一実神道とは天台宗の法華経をもとに考えられた習合神道、要するに仏教と神道が融合した仏教神道です。狩野探幽の筆による『家康天海対座図』(図4)は、家康が天海から山王一実神道の奥義を伝授される「秘伝伝授の対面図」とされています。

考えてみれば、家康は元和元(一六一五)年に秀吉の墓を壊した人物です。現在、京都市東山



(図4)『家康天海対座図』  
(寛永寺現龍院蔵)

区にある豊国廟は、明治に入ってから造り直されたものです。その家康が壊した豊国廟の社僧である梵舜に家

康の埋葬を任せるといふのは、確におかしな話です。さらに、その家康に対して秀吉と同じ大明神の神号をつけるのは不吉ではないか、というのが天海の考えでした。

天海の主張に対し梵舜は黙っていましたが、崇伝と本多正純は強く反発しました。特に本多正純は、「家康公が亡くなって大變落ち込んでおられる秀忠公の面前で、唯一神道で埋葬したのは間違いだなどと言うのはとてもない暴言だ」と言って天海を追い出し、「遠島（島流し）の刑に処するから駿府で待っていていろ」と告げました。言われたとおり天海が駿府で待っていると、家康の埋葬から三日経った二十二日、江戸に帰ることになった秀忠から「天海と梵舜と崇伝の三人にもう一度聞きたいことがあるから、すぐに江戸へ来るように」と通達が来ます。

秀忠はまず梵舜のところへ使いをやり、唯一神道と山王一実神道はどう違うのか尋ねました。梵舜は気が弱い人だったのでしょう、「私は山王一実神道というものを全く知りませんが、唯一神道と比較して優劣はないものと思います」と答えました。これを聞いた秀忠は、次に天海を呼びます。天海は、家康から遺言された法華経をもとにした山王一実神道で祀りたいということ、秀吉の廟所を壊した家康公を大明神号で祀るというのは納得できないということを主張しました。すると秀忠は了承し、山王一実神道の権現号で家康を祀ることを決定したのです。このことは天海が江戸へ連れて行った多賀大社の社僧・慈性じしょうという人が日記に記しています。

じつは三人を江戸に呼んだとき、秀忠は同時に大工の中井大和守正清なかいやまとのかみまさきよに、「久能山の東照宮につくる建物は明神造りで建てるように」と命じています。明神造りということは、そのときはま

だ家康を大明神として祀るつもりだったということです。それが梵舜と天海の話を聞き、意を翻したのです。崇伝には声もかけませんでした。

秀忠から「今後のことは一任する」と言われた天海は、直ちに朝廷に赴くため京都へ出発しました。

### ◆徳川幕府を支えた東照大権現の影響力

天海は、正親町天皇ごようぜいや後陽成天皇ごみずのお、後水尾天皇といった天皇方とも大変親しくしていた面白い人です。その天海が京都入りし、朝廷に「家康を権現号で祀りたい」と言う、と、朝廷ははじめ「権現号なんて聞いたことがない。唯一神道じゃないのか」と否定します。しかし天海が事情を説明すると納得し、権現号を選定することになりました。

そのとき候補に挙がったのが、二条昭実にじょうあきざねが選んだ「東照大権現」と「日本大権現」ひのち、菊亭晴季きくていはるすえが選んだ「威霊大権現」と「東光大権現」の四つです。この二人は当時、朝廷の中で最も有職故実に詳しいといわれていた人物です。四つの権現号を見ると、天海が二人に、家康と東との関係、薬師如来や法華経との関係をいかに力説したかがわかります。「威霊大権現」以外、ほかの三つはすべて東との関わりを表しているのです。

天海が秀忠に「どれにしますか？」と尋ねると、ここでも秀忠は天海に一任します。そこで天海が選んだのが、東照大権現です。法華経じよほんの序品じよほん（第一巻）から繰り返し出てくる言葉に、



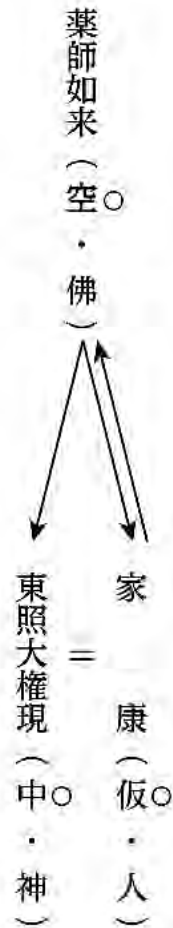
(図5) 鳳来寺山・鳳来寺

「照于<sup>しょうとう</sup>東方<sup>ほうま</sup>萬八千土<sup>まんはっせんど</sup>」という文言があります。「照于東方」をひっくり返せば「東照」です。東を照らし、東に照るという考え方です。それが、天海が東照大権現を選んだ理由だと思います。

次に、薬師如来がここにどう絡んでいて、天海が家康を権現号で祀ることにどんな意味を込めていたのか説明します。

薬師如来は、家康の本地佛<sup>ほんじぶつ</sup>です。家康の母である於大<sup>おだいの</sup>の方が、鳳来寺<sup>みねのかた</sup>（愛知県新城市）（図5）の峯薬師<sup>みねのやくし</sup>に願掛けをして授かったのが家康です。ですから、家康は生前から薬師如来の申し子だといわれています。

薬師如来・家康・東照大権現の関係性を表したのが、82ページ図6です。薬師如来は家康という英雄をこの世に遣わし



（図6）薬師如来・家康・東照大権現の関係性

ました。家康は元和二（一六一六）年四月十七日（私の考えでは十五日）

に亡くなると、薬師如来のもとにお帰りになります。すると薬師如来は家康という英雄がいなくなったら困るだろうからと、代わりに東照大権現という神様を遣わしたのです。薬師如来という仏が背景にいて、人である家康と神である東照大権現がイコールの関係にある。この思想こそが、天海が最も重要視したことです。

東照大権現の「権」は、仏教のいう「権実」の「権」です。実に対する「仮のもの」という意味です。したがって、「権現」は「仮に現れた」という意味です。東照大権現は薬師如来が東照という仮の名前でこの世に遣わした神様、つまり薬師如来の垂迹神です。しかも、薬師如来は家康の本地佛です。ということは、東照大権現と家康はイコールということになります。天台宗ではこれを空・仮・中の三諦がとけ合っているとする「三諦円融」という思想で裏付けています。

江戸時代、一般の人たちは「神君」という言葉を使いました。今でもよく「神君家康」という言葉が使われますが、「家康」は余計です。「神」が東照大権現、「君」が家康を表すので、「神君」



(図7) 日光東照宮石鳥居に掲げられた、後水尾天皇自筆「東照大権現」の扁額

だけでよいのです。江戸時代の人たちがどこまで意味を理解して使っていたのかはわかりません。ただ、神君は家康と東照大権現がイコールであることを表す言葉であり、その思想があったからこそ、徳川幕府はその後二五〇年にわたって、家康がなった東照大権現という神様を精神的な支柱としてきたのです。

そして、これこそ天海が意図したことでした。家康にただ神号をつければいいというものではない、それが幕府を支えるものでなければ家康を神に祀る意味がないというのが、天海の根本的な考えだったのです。天海の説得に応じて権現号をつけたということは、朝廷もその理屈を飲んだということです(図7)。

事実、東照大権現は江戸時代に多大な影響力を持っていました。日本全国江戸三百藩といわれる中に東照宮、あるいは古くは東照社と称した神社は一一〇〇社ありました。一つの藩に三、四社あったということです。

現在は東照宮会というのがあり、一一〇社が加盟しているそうです。かつての十分の一というとな



(図8)『東台大戦争図』(部分) 歌川芳虎(江戸東京博物館蔵)

いと思われるかもしれませんが。ただ、調べてみると、全国の東照宮で一か所も壊してしまったところはないのです。私は加賀へも見に行きました。前田家の城内に置いておくのはま<sup>ず</sup>いと思ったのか、城の外へ出され護国神社という名前にな<sup>っ</sup>ていたものの、東照宮の建物は残っていました。水戸のよう<sup>はいふつきやく</sup>に廃仏毀釈が行われたところでさえ、東照宮は現存しています。このように名前を変えても建物そのものは移築して残すなど、ほとんどが壊されず残っていることに、東照宮という名前の影響力がいかに強かったかを感じます。

東照大権現の影響力の大きさが一番はつきりとわかるのは、官軍と幕府軍が戦争をしたときのことです。主たる戦場は上野と東北でした。そこへ行く前に、官軍は愛知県岡崎市にある滝山東照宮を通っています。それでもこの東照宮は無事に残っていて、今も東照宮を名乗っています。

また、官軍が最初に駐屯したのは芝の増上寺です。そのため増上寺は燃されていないのですが、そのときすぐ隣にある東照宮にも火はかけていません。これも、今でも東照宮と名

乗っています。

最も顕著な例は、日光と久能です。官軍は東海道を攻め上ってくるわけですから、久能から歩いて十五分くらい上がれば、坂道は大変ですが久能山の東照宮へ行くことができます。ところが久能山東照宮はまったく壊されることなく、立派に現存しています。

日光の東照宮は、今の輪王寺、かつての満願寺まんがんじが幕府軍に味方していると見なされていたため、官軍に対して火をかけたなり戦争したりしないでくれと嘆願します。すると官軍は「日光に行って火をかけるつもりはない」と言っていて、日光の東照宮も輪王寺もまったく傷を負うことはありませんでした。本当に幕府が憎ければ、一番の中心である家康の廟所を焼きに行くはずです。しかも、今なら車で行けば一時間かからない距離にある宇都宮で戦争をしていたの



(図9) 上野東照宮 金色殿 国重文

です。にもかかわらず、官軍は日光の東照宮を焼きに行くことはしなかったのです。

江戸時代二五〇年にわたる歴代将軍のお墓にも手はつけられていません。寛永寺は戦争でかなりの建物が燃やされましたが、将軍家のお墓は無事でした。特に上野の東照宮は、彰義隊が本陣を置いたところです。あの場所に三つ葉葵の旗を掲げて彰義隊が本陣を置いている絵が残っています（84ページ図8）。官軍はそれを知っていても攻めませんでした。寛永寺の建物は燃やしても、東照宮には火ひとつかけなかったのです。しかも、攻めたのは下級武士の率いる軍隊です。下級武士ならやってしまいそうだと思う人もいるでしょう。それでもやっぱりできなかった。やらなかったのではなく、できなかったのです（85ページ図9）。

天海が家康を東照大権現として祀ってから二五〇年間、それが大名や武士階級にとっていかに大きな存在意義を持っていたか、おわかりいただけるでしょう。幕府の精神的な支柱が、武家たちにとっても犯しがたい存在になっていたといえます。

天海は信念に基づいて行動するため、納得のいかないことは幕府にも盾突くなど、一切妥協しませんでした。そういう点で、とても尊敬できる方だと思っています。



連続講演会第五回（令和六年二月十二日開催）

## 江戸の外交と海外情報

講師  
松方  
冬子

## ◆国書が重要視された江戸時代の外交

日本とオランダの外交を中心に、江戸時代の海外情報についてお話をさせていただきます。日本史における外交といえ、だいたいは国書こくしょの話になります。「日出処天子ひいずるところのてんし、至書日没処天子無恙しよをひつするところのてんしにいたすつつがなきや」。これは聖徳太子うまやどのみこ（厩戸皇子すい）が隋ずい（中国の王朝）の皇帝に送った国書の一文です。中国の人たちが隋書倭国伝に残しています。「無恙」は「お元気ですか」という意味ですから大した内容ではありませんが、手紙をやり取りすることが大事だという外交の世界を表しています。

日本史で最後に国書という言葉が出てくるのは、おそらくマシュー・ペリーが大統領ミラード・フィルモアの国書を將軍に奉呈して日米和親条約を結んだという記述です。ただし、もちろんアメリカではそれを「国書」とは呼んでおらず、ただ手紙を書いたつもりなのですが、日本人が国書だと解釈したことになります。

では、日本における国書とは、どのようなものだったのでしょうか。日本では、室町時代の終わり頃から他国の国主から送られた文書を「書」と総称することが始まり、江戸時代に定着したと思われる。明の皇帝が日本へ送った文書は、「書」ではなく「詔書」「勅」や「制」などです。それは「勅」や「制」が上の立場から臣下に下す文書であり、「書」は対等な相手に書く手紙だからです。明の皇帝は、自分と対等な相手はいないということ、ほとんど「書」を書いていません。しかし



(図1)『朝鮮国王国書』(部分)(東京国立博物館蔵)  
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

日本側からすれば、「我々は明の臣下ではなく対等だ」という意識から、「書」と理解していたのでしよう。

江戸時代になると、将軍が他国の国主とやりとりした書翰しょかんを国書と呼ぶ例が出てきます。江戸時代の将軍が安定的に外交関係を結び、手紙のやりとりをしていた相手は、朝鮮の国王だけです。朝鮮側が国王の手紙を国書と呼んでいたため、真似をしてこの言葉を使うようになったと思われます(図1)。

続いて、ヨーロッパとアジアの外交を比較しながら、外交の世界史を見ていきましょう。今までがら、外交の世界史を見ていきましょう。今まで  
の研究では、ヨーロッパとアジアの外交を、ヨーロッパの「主権国家体制」とアジアの「華夷わい秩序ちつじょ」という対比で理解してきました。ヨーロッパでは国同士がお互い対等なのに、アジアには上下関係があるということです。中国の皇帝は相手を下に見て外交を行いましたので、平等のヨーロッパと不平等のアジア、民主主義のヨーロッパと権威主義のアジアという対比で理解することが一般的となっています。

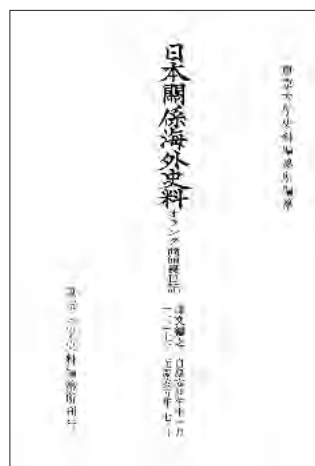
この見解は、単に歴史がそうだったというだけではありません。例えば、現在のアメリカ大統領バイデン氏が「私たちは民主主義、アジアは権威主義」と言って中国の最高指導者習近平氏を

批判するように、今の世界のあり方や外交の仕方にも影響を与えています。ただ、この分け方は果たして本当なのだろうかという疑問もあります。それぞれがどういう価値観なのかで説明しようとする、選ぶようなものとして差別につながりやすいですが、そうではなく、現場で具体的に何が行われていたのかというところも見ていくべきだと思います。じつは、ある時期まで、ヨーロッパ外交もアジア外交も、国書によって行われていたのです。

ヨーロッパから日本近海に人が来るようになったのは、十六世紀の終わりにポルトガル人が種子島に漂着してからです。その後もスペイン人、オランダ人、イギリス人らが続々と来日しますが、アジアのヨーロッパ人は、圧倒的多数のアジア人と比べると極めて少数派です。アジア人との接し方がわからないため、基本的には相手に合わせるしかなく、自分たちのルールを上手に説明することもできません。

日本の外交世界の中に入っていくには、どうしたらいいのか。広くいえば、東アジアの外交世界に入り込むにはどうしたらいいのか、ヨーロッパ人たちは、話を聴いてもらうにはどうしたらいいのかを試行錯誤しました。その結果、正式な外交使節だと認められるには、しかるべき人からのしかるべき手紙を携えていなければならないということが、だんだんわかってきます。

しかるべき手紙とは何か。オランダ人が大事なポイントを発見しました。それによれば、国書に書かれる内容は商人の用件ではなく、国王の用件でなくてはなりません。国王の用件とは、例えば戦争の際に援軍を送る通知や新国王即位の知らせなどです。政治的使命を背負っていること



(図2)『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』  
(東京大学史料編纂所刊行 2021)

はあっても、自分たちの商売をうまく進められるように交渉をしたいという商人の用件が書いてあると、手紙は受け入れられないのです。

この話は、『オランダ商館長日記』(図2)に書いてあり、徳川幕府の大老酒井忠勝が平戸藩主に語った言葉を、当時の平戸オランダ商館長フランソワ・カロンが記録したものです。アジアにいるヨーロッパ人の多くは商人でしたので、商売をうまく進めるための外交をしたくても、それは国書ではないとして受け付けられないという大きなジレンマを抱えていました。

また、コルネリス・ファン・ネイエンローデという平戸オランダ商館長がオランダ領東インド総督に送った手紙には、こう記されています。「東アジアの外交使節は、単に手紙を運ぶ人だ」。我々も、国書を運ぶ人を外交使節と呼ぶことがあります。当時、国書を運ぶ人が交渉することは想定されていないということです。例えばフランスからスペインやオランダへ行く大使は信任状を持っており、国王の言葉を代弁することができます。しかし日本や東アジアから国書を持つてくる使節は、単に手紙を運んで返書をもたらって帰るだけです。つまり使節が何か言葉を発して、それを將軍の言葉として聞いてもらうことは想定されていませんでした。これはヨーロッパ側からすれば、非常に難しい問題でした。

## ◆実現しなかったルイ十四世の使節来航

さて、ここからは、フランス国王ルイ十四世の使節のお話をします。太陽王と呼ばれたルイ十四世は、ヨーロッパ史上非常に有名で、ヴェルサイユ宮殿を作った人です。その時代に宰相を務めたコルベールという人物は、海外にどんな船を送って貿易をしようと、積極的な対外政策を行いました。コルベールは一六六四年、日本でいうと四代将軍家綱の頃にフランス東インド会社を再建し、アジア貿易を本格的に始めました。フランス東インド会社は、国王の強力な援助のもと、アジア貿易と同時にフランス人宣教師の保護も目的の一つとして設立されました。

イギリス東インド会社は一六〇〇年、オランダ東インド会社は一六〇二年に設立されており、フランス東インド会社はそれらに六十年ほど遅れて設立されたため、アジアに対する知識が非常に少ないわけです。そこで平戸オランダ商館長を務めたことがあるフランソワ・カロンを上級職員として招聘<sup>しょうへい</sup>し、彼の知識に頼る形で東アジアへの進出を考えました。

フランソワ・カロンはフランス系オランダ人で、宗教的な理由から現在でいうベルギーで生まれました。オランダで活動を始め、十代の頃からオランダ東インド会社に勤務していました。日本語が上手で、奥さんも日本人です。商人としても有能で、商館長を務めたあとは東インド評議会参事、台湾長官、最終的にはオランダ東インド事務総長にまで登り詰めました。その間、国書外交に尽力し、アジアの外交にどのように参入すればよいかを学んでいきました。ただ有能すぎ

たのか敵も多く、一六五〇年には讒言ざんげんによって解雇されてしまいます。ヨーロッパに戻って隠居生活を送っていたところ、フランス東インド会社に招かれます。

カロンは、コルベールにさっそく上申書を送りました。その上申書から抜粹します。「私の考えでは、より上手く始めるには四〇〇トンの小さな船を二隻、中国と日本に送るしかないだろう。そして商業の自由を求め、許可を得たのちに商業を始めるのである」。さらに、「日本に商品を持ち込むのはいかなるものであれ、皇帝（将軍）に謁見を果たした後か、交易の自由を得た後でない」と禁止されているからである。故に、まず船は空の状態で日本に向かい、王の使節としてのみ振る舞い、いかなる商品も商人も乗っけてはならない。政治と名誉にかかわる問題でこれほど細心綿密なところは世界にないのである」。

つまり、「いきなり行くのではなく、まずは許可をもらう必要がある。日本に商品を持ち込むには交易の自由を得たあとでないといけない。空の状態の船で日本へ向かい、王の使節としてのみ振る舞い、いかなる商品も商人も乗っけてはならない。国王の要件で来たことで許可をもらってから貿易を始めよう」と言っているわけです。

コルベールからカロンへの訓令文から抜粹します。「貴下は（中略）まっすぐ東インド会社の商館がある場所へと向かい、いかなる商品も積まず、日本に報告すべき情勢のみを収集すること。なぜなら中国との自由貿易権を我々が得ていれば、それを日本の幕閣たちに知らしめることが必須の事項であるからである」。

しかしこの訓令文は、おそらくカロン自身が書いていると思われます。カロンが見ず知らずのフランス人を連れて長い航海をして日本へ行くために、まずは自分を認めてもらい、命令を聞かせるための自作自演ではないでしょうか。自分がやりたいことは、コルベールの命令なのだというにしたいのでしょうか。「日本に報告すべき情勢」というのは、「アジア各地の情報をとにかく集めて持っていくように」ということです。将軍に一番ウケがいいのは海外情報です。特に中国との関係は日本人が知りたいことでした。

訓令文の抜粋を続けます。「そして北緯三三度四〇分に位置する長崎湾に至ること。（中略）当該湾に達する以前に、貴殿の船に沿岸警備の小舟が来ることは必至である。どこから来た艦船で、誰がいるのか尋問されるであろう。貴殿はフランス国王から高貴で至上存在たる日本皇帝（将軍）への親書を携えた特使であり、フランスから来たと答えよ」。カロンは、日本に知らない船が来たらどう対応されるのか、さらに質問攻めに遭うということも知っていたことになります。

訓令文は、「日本人は異人たちを注意深く観察する。とりわけ、一六二八年の驚くべき出来事、つまり、あるオランダの使者が日本人を欺いて以来のことである。すなわち、オランダ東インド会社はその使者を將軍就任の祝賀のために送り込んだのであるが、オランダ国王から派遣されたと説明して、王の大使としての待遇と栄誉を与えられた。（中略）オランダ東インド会社の使者であることが露見し、謁見を賜ることなく、恥辱とともに送還されたのである」と続きます。

この時代のオランダは共和国で国王はいませんから、国王の使節と言った時点でおかしいので

す。しかも、アジアの拠点バタヴィア（インドネシアの首都ジャカルタのことをオランダ人はこのように呼びました）から送られてきたのに、本国から来た嘘をつき、途中でオランダ東インド会社の使者であるということがバレて、結局將軍に会うこともできないまま帰らざるを得なかったのです。この話はコルベールが知る由もないので、当然カロン情報です。

ほかにも訓令文には「ヨーロッパでしばしばなされるように、高貴な人間や功績のある人物の近くで帽子をかぶることは日本の習慣にはまったくないのである」と書かれていました。これは、日本で偉い人に会うときには帽子を脱げということですね。

カロンが持っていたルイ十四世の国書を抜粹します。「朕は朕個人の意向と臣下の皆の懇願を満たすため、東洋の全王国に使節を派遣することを決心しました。それゆえフランソワ・カロンを陛下へ送ることにしました。カロンは日本語を解し、幾度も陛下へ光栄にも御挨拶し、謁見させていただいたことがあります。朕が王国と国家の全商人と、東インド会社一同の総意に基づき、朕よりの陛下へのお願いが勅許され、貴帝国の全土における自由貿易がいかなる問題も支障もなく進展しますことをお願い申し上げます」。

「アジアにはいろいろな国があると聞いたので、非常に興味を持って使節を送ることにしました」というのは個人の意向の部分です。一方、「臣下の皆の懇願を満たすため」というのは、「アジアで貿易をするフランス商人たちが手紙を送ってくれと頼むから、仕方なく送ります」ということです。国王の用件ようですが、商人の用件でもあると言っているのです。「国書を持って



(図3) フランソワ・カロンの航海経路

いく人は、本来は単なる手紙を運ぶ人ですが、なんとかカロンの話す機会を与えてほしい」というメッセージも加わっています。「フランス王国と国家の全商人とフランス東インド会社一同の総意に基づいて、私ルイ十四世から將軍へのお願いが許され、日本全土における自由貿易がいかなる問題も支障もなく進展しますことをお祈りします」ということで、結局は商人の用件になっているような手紙でした。

一六六六年三月、カロンはフランスを出て大西洋を南下し、七月に夜の闇に紛れて喜望峰を通過し、マダガスカルへと向かいます。なぜ夜の闇に紛れなければいけなかったのかというと、当時喜望峰はオランダ東インド会社が押さえており、商売敵のフランスが通るのを嫌がったからです。

フランスは、イギリスやオランダの手が伸びていないマダガスカルに拠点を築こうとしていましたが、それがあまりうまくいっておらず、食料を手に入れることができませんでした。そのため喜望峰まで戻り、恥を忍んでオランダ人に頼んで食料を補給しました。ちょうどその頃、オランダがイギリスと戦争を始めており、フランスはオランダ側につきました。アジアでは商売敵でも、本国の事情で味方になりましたので、オランダ人

もあまり意地悪がでずに便宜を図ったということです。

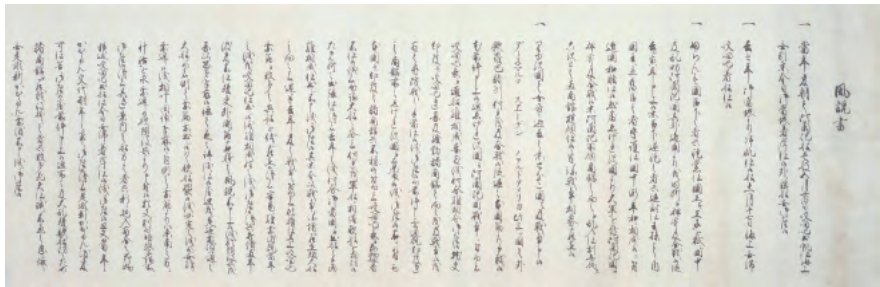
その後カロンは、マダガスカルを経てインドのストラトに到着します（図3）。しかしそこでフランス人の部下たちとけんかをして、それ以上航海を進められず、結局日本に来ることはできずにヨーロッパへ戻ってしまいました。こうしてルイ十四世の使節は不発だったわけで、歴史の教科書にも書かれない出来事となりました。

### ◆風説書を通じて海外情報を得る

海外情報の話に入ります。寛永十八（一六四一）年、平戸オランダ商館は長崎出島に移転しました。それ以来、商館長は「ポルトガル人やイスパニア人（スペイン人）が日本に悪いことを企てていると聞いた場合は、長崎奉行に報告するように」と命令されます。毎年オランダ船が到着するたびに、通詞がオランダ人から海外の情報を聞くようになったのです。

さらに寛文六（一六六六）年からは海外情報を書面で提出するようになります。これがオランダ風説書です。オランダ風説書の原本は江戸に送っていましたので、江戸城の火災で焼けてしまいます。唯一現存しているのは、寛政九（一七九七）年に書かれた風説書です（98・99ページ図4）。オランダ人が話した内容を日本語に翻訳した通詞の名前が書かれ、捺印されています。

寛文七（一六六七）年夏、五通の風説書が作成されました。商館長は毎年交代しますが、新しい商館長コンスタンティン・ランストが来日してしばらくの間は、前任の商館長ダニエル・シッ



クスと二人で仕事をするようになりました。二人で長崎奉行所に交代の挨拶に行くと、「ヨーロッパ人が来日する情報を聞いたら、すぐに奉行に伝えなければならぬ」と言われました。いつにも増してしつこく言われましたので、ランスストは「奉行はカロンの来航について知っているのではないか」と推測しました。

同年十一月、シックスは日本を離れ、ランスストは一人で仕事をするようになります。すると、ファン・フリートという若い商館員から驚くべき情報を聞かされます。彼はカロンの甥として知られる平戸在住の日本の商人から「カロンは今年の夏にフランスの船団長として東インドに来ており、すでに喜望峰を過ぎたと聞くが本当か」と質問されたというのです。「それについては知らない。誰から聞いたんですか」と彼が聞いたところ、返事はなかったそうです。さらにその少し前の寛文七（二六六七）年春、前任の商館長シックスが江戸参府に赴きます。將軍に拝謁するため登城した際に、<sup>しゅつもんあつたため</sup>宗門改役の北条氏長と保田宗雪から、將軍の名前で次のような命令をされます。

「オランダ人は全ヨーロッパにまたがる航海をしており、ヨーロッパの出来事はすぐにオランダ人の知るところとなるのであるから、新しい



(図4)『風説書』寛政9(1797)年  
(江戸東京博物館蔵)

ヨーロッパの知らせはすべて、特にどこかの国民が日本に向かっているということは、幕府に知らせなくてはならない。なぜなら、將軍はオランダ人の誠実さを信じており、オランダ人に日本での貿易を許しているのは、オランダ人の忠誠に欠けている点がないからであり、また会社がヨーロッパで起こったことはすべて正直に報告しているからである」。

続けて、「もしヨーロッパのどこかの国民が日本に現れ、それについての報告が前もってオランダの東インド会社からなされていなければ、オランダ人は不誠実と見なされ、オランダ人の日本における通航と交易は永久に禁止されるだろう。このことをよく考えるように。ただのつまらないことであっても隠しておいてはならない。もし会社が後で言い訳をしようとしても、それは聞き入れられない。最後に命令する。もし、まだ何か忘れていることがあって思い出したら、今からでも報告するように」と。江戸を出発する最後の日まで毎日定宿の長崎屋に来てこの話をされたため、オランダ人としては、日本側が何か知っているのではないかと思わされていました。

カロンの情報を日本に持ってきたのは、おそらくランストです。ファン・フリートやシックスは何も知らなかったのですが、寛文七(一六六七)年夏に来日したランストは知っていました。

ランストは、「フランスの新会社設立について、これ以上長崎奉行に黙っていることはできない。フランス艦隊が日本に到着する約一カ月前になって初めて知らせれば、長い間黙っていたことを日本人は悪く解釈し、日本への通航が禁止されかねない」と思ったわけです。

ランストは、できるだけ適切な方法で長崎奉行に告げることが必要だと判断します。風説書の内容を具体的に知るため、日本語からオランダ語に翻訳するように通詞に要求するのですが、通詞の翻訳が遅延してしまいます。そこで、ついに翻訳を待たずに奉行に知らせよという命令を出しました。ランストが急いだのは、長崎奉行河野通定がこの年の十一月頃に江戸へ出発し、オランダ船来航の事項を幕府に報告する予定だったからです。通詞たちからは反対されますが、ランストも粘り、相談の結果、六通目の風説書を書くこととなります。その内容をオランダ側のものに基づいて紹介します。

「オランダの近くに所在するフランスは、東インド全体で貿易をするため新しい会社を設立した。フランソワ・カロン閣下はその会社の船何隻かを率い、貿易の許可を願い出る使節として、日本・中国・トンキン（現在のベトナム）に来ようとしている。このことは、將軍と長崎奉行に知らせるために、総督閣下からトンキン経由で書き送られた。これは噂によって聞いただけだが、さらなる確報が届いたならば、来年さらに詳しく総督閣下から書き送られてくるだろう」。

この内容には、フランスの新会社設立とカロンが日本に来る使節に任命されたことだけが書いてあります。艦隊がすでに喜望峰を過ぎたことは秘密にし、すべてが単なる噂であると強調しま

した。この文書を受け取った長崎奉行は、「なぜオランダ人は船がいるうちにそれを知らせなかったのか」と通詞たちに尋ねます。通詞たちが黙って畳に頭をこすりつけたところ、それ以上の追及はしなかったということです。

風説書についてお話ししてきましたが、じつは紙に口頭で述べた情報を書き記した文書に「風説書」という表題がつくのはこのときからで、それまでは「口書」と呼んでいました。<sup>くちがき</sup>「風説」とは噂の意味ですから、風説書と呼び変えたのは、単なる噂であるということを強調したかったからなのかもしれません。

ところで、平戸在住のカロンの甥なる人物は、噂を知っていたのでしょうか。ランストもとても気になったと思われるこの疑問について、商館長日記にはこのように書かれています。

「今こそ通詞たちに調査させたい。どのような方法で誰から、平戸在住のカロン氏の甥が、彼の伯父が何隻かの船団で日本に恐らく来るであろうということを知ったのかと。しかし、日本人が関与している案件なので、詳しく捜査をして損害を受けるよりも、むしろそのままにしておくのが最も良い。口の軽いオランダ人がカロン閣下の甥に自分のほうから伝えたというように疑われるにもかかわらず」。結局、詳しい調査はしませんが、ランストの推測としては、商館員から漏れたか、海外の日本人からの書翰で知ったかという二つの可能性が示されています。可能性の一つ目として、こっそりオランダ人が漏らしたのではないかという推測がされているように、この頃には日本人と個人的に親しくなるオランダ商館長や商館員が出始めていたといえ

ましよう。二つ目の可能性として想定されているのは、シャム（現在のタイ）やトンキンに住んでいる日本人からの書翰です。シャムやトンキンには、フランス人の宣教師がいましたから、彼らにフランスの会社の情報が入り、同地にいる日本人から唐船に託して、長崎の知り合いに手紙が来た、という可能性です。このルートについて確証はありませんが、可能性としてはありえたいと思います。

本日のお話を簡単にまとめます。最初にお話ししたルイ十四世の国書については、平戸オランダ商館長を務めたことがあるフランソワ・カロンが日本で培った知識を駆使し、フランスのために新しい関係を築く工夫をしたものでした。ルイ十四世が日本に使節を送った目的は、「自由貿易の獲得」でしたが、国書を携えた使節が、「商人の用件」ではなく「国王の用件」で来たと考えられるために、さまざまな工夫が凝らされていました。

海外情報の提供については、江戸の長崎屋も舞台の一つとなっていました。オランダ人が当初フランス使節の来航情報を伝えないことを選んでいたのは、日本がフランスというライバル国を貿易相手として受け入れるのを嫌ったからではないでしょうか。一六六〇年代には海外にいる日本人からの書翰が日本に届き、これがオランダ人に正しい情報を提供させる圧力の一つとなっておりました。当時はオランダ東インド会社の最盛期で、多いときには年間十六隻ぐらいの船が日本に派遣されていました。意外と、オランダ人と日本人との個人的コネクションが勝っていたのではないかとも思っています。



連続講演会第六回（令和六年二月二十三日開催）

## 江戸の建築

講師  
稲葉  
和也

## ◆江戸の町づくりの移り変わり

私は台東区の文化財保護審議会委員として、五十年近く文化財の指定や保存に携わらせていただき、その間江戸の文化についても学ぶことができましたが、本日は「江戸の建築」というテーマでお話をさせていただきます。まず、江戸の建築がどのように成り立ってきたかを振り返ります。東アジアの最も東に位置する日本は、古くから中国・朝鮮などの影響を受けてきました。日本が独自の建築文化を確立したのは、十五世紀に起こった応仁の乱（応仁元（一四六七）年（文明九（一四七七）年）以降ではないかと考えます。というのは、弥生時代からあった鉾やりかん、槍やり、横挽き鋸のこ、鑿のこなどによる工作技術は、ほとんど変わらないまま室町時代まで続いています。縦挽き鋸が普及するのは十五世紀以降で、それまで材木を縦に使う場合は、丸太を割って鉾やりで削り、槍やりで仕上げていたのです。

この間、技術が一般に普及しなかった理由は、古代からの制度の問題です。律令制りつりょうの時代、朝鮮などから渡来してきた技術者が都城や宮殿・寺院の造営を指導しましたが、その技術は国家が支配していました。国家は租庸調そようちょうの税制のもとで、「租」の米を収められない地域の農民には労役の「庸」で代納させて、特別な技術を身に付けさせました。古代から「飛驒しやうたんの匠」と称賛された名工は、そのような背景から生まれたのでした。

中世になると荘園制しやうえんにより、領主のもとに結成された「座ざ」の中で職人が養成されます。そ

の技能はやはり一般に開放されることはありませんでした。

ところが応仁の乱以降、幕府や守護大名、領主たちの弱体化によって座が崩壊し、技術が一般化していきます。特に戦国時代は、建築技術が普及するきっかけになったのではないかと思います。例えば豊臣秀吉は、朝鮮征伐の際、九州に名護屋城を造るために大名を集めます。その中で「あいつの技術はすごい」といった具合に技術の切磋琢磨が起ること、地方にも建築技術が伝播していった可能性は大きいといえます。大坂には四天王寺などを造った朝鮮の大工が住み着き、技能集団を形成していました。それが秀吉などによって築城や土木事業に徴用され、近世の生産基盤となつていったと考えられます。

その当時、大工たちがこっそり見ていた秘伝書がありました。江戸時代に入るとそれが印刷されて、大工の技術書となります。技術書は農村にも広まり、建築技術が急速に広がっていきます。こうして近世直前になつて、ようやく日本の建築技術が確立するのです。

続いて江戸の町づくりの変遷を見ていきましょう。徳川家康が江戸に入ってから江戸時代が終わるまでを五期に分けてみました。第一期は天正十八てんしょう（一五九〇）年、家康が関東に来てから、慶長二十（一六一五）年の大坂夏の陣が終わるまでです。家康は領地を関東に移封された後、関八州全体の計画を着々と進めていきます。街道や水路を整備することによって、町づくりの準備をしていた時期です。

第二期は、元和二（一六一六）年に家康が没して以降です。寛永二（一六二五）年に天海僧正

によって寛永寺が創建され、比叡山延暦寺をモデルにした建物が造営されました。ほかにも浅草寺の伽藍<sup>がらん</sup>整備や江戸城の改修など、ほとんどの造営がこの時期を中心に行われています。ここで注目していただきたいのは、承応三<sup>じょうおう</sup>（一六五四）年、寛永寺の貫主<sup>かんじゅ</sup>に皇室から守澄親王<sup>しゅていしんおう</sup>が就任し、翌年、天台座主<sup>てんだいざす</sup>になったことです。これは寛永寺が天台宗の総本山となり、江戸幕府の宗教の中心となったことを示す重要なポイントです。

第三期の始まりは、明暦三（一六五七）年です。この年の大火によって江戸の町はほとんど燃えてしまいます。都市計画の見直しが図られ、その後火除地<sup>ひよけ</sup>を造成したり、隅田川の東側にも居住地を広げるために両国橋が架けられたりします。新しい建造物としては、元禄十一（一六九八）年に寛永寺の本堂として根本中堂が建立されます。これは比叡山延暦寺の根本中堂よりも大きく、おそらく日本で一番大きかった建物だと思います。この本堂を中心に全部で三十六の坊ができ、寛永寺の伽藍が形成されました。延宝八<sup>えんぼう</sup>（一六八〇）年には四代將軍家綱、宝永六（一七〇九）年には五代將軍綱吉の靈廟が造られ、主だった造営はこのあたりでほとんど終わっています。

第四期は、享保元（一七一六）年からです。八代將軍吉宗が就任し、享保の改革として財政逼迫<sup>ひつぱく</sup>に対してさまざまな政策を打ちます。お金のかかる靈廟を造ることも禁止し、この時期、目立った建造物の造営はほとんど見られません。一方で、町はどんどん膨らんでいきます。よく江戸を「八百八町<sup>はっぴやちやう</sup>」といいます。八〇八町になったのは第三期の延宝七（一六七九）年で、吉宗の享保九（一七二四）年には約倍の一六七二町になっています。人口も爆発的に増え、

一〇〇万人を超していたと推定されます。隅田川の東側にも旗本の屋敷が増え、西は新宿のほうへも屋敷地がどんどん広がっていきました。明和七（一七七〇）年には、質屋を二〇〇軒以上に増やすという掟が出されています。質屋は庶民の銀行で、日常にないと生活できないものでした。質屋と風呂屋の数は都市のバロメーターだと思われていますが、たくさん質屋があったことから、江戸の人口がいかに多かったかがわかります。

第五期は、十一代将軍家斉が就任した天明七（一七八七）年からです。この頃も造営はほとんどできていませんが、その代わりに江戸らしい文化が生まれます。浅草に「駒形どぜう」や「八尾善」といった有名料理屋ができたのもこの時代です。文化二（一八〇五）年には治安の悪化に伴い、関東取締出役が設置されます。それだけ近在の農村が都市化していったということです。文政元（一八一八）年にできた江戸の朱引図を見ると、江戸の広がりがよくわかります。

### ◆絵図で見る寛永時代の江戸の町並み

大分県臼杵市から寛永時代の江戸全図をお借りしました（108ページ図1）。高精度カメラで撮影したものを拡大できるので、皆さんと一緒に寛永時代の気分になって当時の江戸の町を見てみましょう。

「品川」（図1-①）と書いてあるところが品川宿です。東京湾に中洲のように島が点々とあり、この島を伝って東海道ができていました。そこからずっと上がっていくと増上寺（図1-②）が



(図1)『江戸全図』(白杵市教育委員会蔵)

北側にはすでに東照宮が造られています。その周りには徳川御三家の屋敷が並びます。名前が書いてあるところはほとんど武家屋敷です。浅草(図1-⑤)には浅草寺があり、その裏にはいくつものお寺がありました。江戸時代以前はいろいろな宗派を含めて一〇〇か寺くらいありました

あり、大門・本堂・五重塔・廟が描かれています。二代將軍秀忠の廟を過ぎ、新橋、日本橋(図1-③)のほうへ行くと、きれいな格子状に町屋ができています。この時代の輸送ルートは舟運しゅううんで、町屋の裏まで舟が入り、物資を運搬できるようになっていました。

江戸城(図1-④)には本丸と西丸があり、

が、江戸時代になって整理され、三十二坊に減らしたそうです。明治時代に浅草十六区ができた場所、当時は浅草田んぼといわれるほどの湿地帯でした。明暦三（一六五七）年の大火後に吉原が移った日本堤<sup>づつみ</sup>の湿地沿いには、三十三間堂（図1-⑥）が寛永十九（一六四二）年に建てられました。これは京都の三十三間堂を真似て、民間の力で造られたようです。その後、元禄十四（二七〇二）年に深川へ移築されるまでここにありました。

寛永寺の近くに不忍池がありますが、弁天堂<sup>べんてんどう</sup>はまだ造られていません。寛永寺境内には、大僧正の住まいである本坊や、五重塔が見えます。お堂は寛永年間に造られた担い<sup>にな</sup>堂といって、渡り廊下でつないだ二つのお堂が建っています。

次に寛永年間に描かれた『江戸図屏風』を見ていきます。ここでは建物に注意してご覧ください。二枚あるうちの『左隻<sup>させき</sup>』から見ていきます（110・111ページ図2）。

品川（図2-①）には宿場の門があり、建物がつながっています。屋敷境に壁のようなものが立ち上がっているのを「卯建<sup>うだつ</sup>」といい、延焼を防ぐ意味で造られています。また、「厨子<sup>くし</sup>二階」という屋根裏部屋が付いた建物も見られます。柱は角柱のほか、皮付きの丸太をそのまま使った「黒木造<sup>くろぎづくり</sup>」のものもあります。角材は手間がかかるので、当時一般の農民の家は黒木造がほとんどでした。屋根も茅葺<sup>かやぶき</sup>、こけら葺、板葺（石置）などいろいろなタイプがあります。瓦は少なく、土蔵くらいにしか使われていません。土台は見えませんが、この頃はもう掘立ではない造りだと思っています。しかも、土蔵には漆喰<sup>しっくい</sup>を使っています。江戸城を造るために青梅の成木<sup>なりき</sup>から運ん

た漆喰が、町方にも行き渡るようになりました。

品川宿から東海道を東へ行き、増上寺に参ります（図3）。門、本堂、伽藍があります。その西側に、「台徳院殿御仏殿」と書いてあるのが、秀忠の靈廟です。透垣すきかきで囲まれた、おそろく権現造のお堂で、金箔や黒漆うるしを使った立派な靈廟です。ここ



でお参りをしてから階段を上がり、門をくぐってさらに行くと、五重塔と八角形の建物の中に宝塔（廟）が

あります。増上寺の境内には、御台（奥方）である崇源院の廟も造られています。

だんだんと江戸城に近づいてきます。新橋（図2・②）辺りには、町方の町屋には漆喰がたくさ



（図3）『江戸図屏風 左隻』増上寺（国立歴史民俗博物館蔵）

橋の中心地です。日本橋のもとには魚屋とともに材木町がありました。この辺りは漆喰造りが多く、造りが丁寧で、二階家もあります。この厨子二階には丁稚<sup>でっち</sup>などを住まわせていましたが、人口が増えてくるととても住めなくなり、裏長屋が造られるよう



(図2)『江戸図屏風 左隻』(国立歴史民俗博物館蔵)

ん使われていて、櫓<sup>やぐら</sup>(望楼)のような高台や造園された中庭も見られます。柱はすべて角材で、町方と外側では家の造りがかなり違うことがうかがえます。

京橋、中橋を渡ると、日本橋です(図4)。魚を日本橋の船着場に集めて、売っているのでしょうか。魚屋が並ぶ小網町は、日本



(図4)『江戸図屏風 左隻』日本橋(国立歴史民俗博物館蔵)

になります。ですからこの屏風絵が描かれた時期は、町民の生活がさほど過密ではなかったということです。また、江戸には火事が多かったので、土蔵とともに地下室むろも造られました。火事が起るとそこにもものを放り込み、畳で蓋をしておくと、商品が燃えずに済むというわけです。地下室は商家だけではなく、寺にも造られていました。



いよいよ江戸城です（図5）。江戸城の天守は明暦の大火で焼けしまった後、再建するのをやめてしまいました。しかし、この絵を見ると天守がどんな造りだったのかがわかります。軒下は黒漆喰塗り、唐破風からばふが付いていて、天守の上には金箔の大きな鯰鯢しやちほこがあります。家康が造った天守は屋根が全部、鉛を入れた瓦でした。いざというとき、鉛は鉄砲の弾



（図5）『江戸図屏風 左隻』江戸城（国立歴史民俗博物館蔵）

太鼓橋は石製ですが、この頃はまだ木造でした。神田川を下っていくと、人が通る橋の横に水を取り入れるための樋とぎがあります。これは江戸城下に上水を流すための水道橋です。つまり水戸家の屋敷は単なる庭園ではなく、そこで水を管理して江戸の城下町に上水を配っていたのです。



(図6)『江戸図屏風 右隻』(国立歴史民俗博物館蔵)

になるからです。大名たちが会合を行う本丸があり、裏には家康の廟である東照大権現宮が造られました。

城の外には水戸・尾張・紀州の徳川御三家が並んでいます。この御三家の茶色い屋根に注目してください。これ、じつは銅板葺です。銅は長崎から中国・オランダに輸出していた幕府の専有物で、幕府直轄の建築物にしか使われませんでした。駿河の大納言の門も、唐破風でちょっと別格です。このような門や御三家の屋根は、本当にすごいものだと思います。

続いて『右隻うせき』を見ていきます(図6)。神田川の下屋敷(図6-①)があります。今ある



(図7)『江戸図屏風 右隻』寛永寺（国立歴史民俗博物館蔵）

次に寛永寺です（図7）。不忍池がありますが、弁天島はまだ作られていません。この頃は露天の大仏や時の鐘も既にありました。靈廟はまだないので、三代将軍家光が亡くなる前です。東照宮は今とほとんど変わらず、本殿は銅板葺の権現造。銅板の上に黒漆を塗って、金箔を貼っていたようです。五重塔は東照宮のために正面向きに建てられています。

浅草のほうも見ていきましょう（図8）。浅草寺には五重塔があったのですが、その前の寛永年間には三重塔が二つあったそうです。この時代は一つだけになっています。五重塔と三重塔が両方建っていた時期もありました。この辺りは町中と違い、茅葺屋根や黒木造の建物が見られます。漆喰だけでなく色壁のようなものもあり、屋根もいろいろです。橋がないため、渡しの舟が出ていました。

奥州街道には、殿様の行列が描かれています。これは家光がどこかへ行くこうとしているのでしょう。奥州

街道を進むと鶴巢御殿（112・113ページ図6-②）という大きな御殿があり、家光はそこへよく通ったようです。川越（図6-③）にも御殿があり、そちらにもよく出かけていました。鶴巢御殿の少し北側に描かれているのは、お鷹狩りの図（図6-④）です。家光はあちこちで鷹狩りをやっていました。少し西へ行くと、加賀藩前田家の屋敷（図6-⑤）があり、ここにも黒木造の建物があります。これは東屋あずまやですから、池に張り出した茶室のような風流な造りにしていたのでしょうか。

この屏風絵の高精細画像は、国立歴史民俗博物館のWEBギャラリーで見ることができます。ぜひパソコンで拡大して見てみてください。もつといろいろなことが発見できると思います。

### ◆江戸の建築の特徴

江戸の町の変遷に話を戻します。江戸は京都や大坂に比べて火事が多く、大火だけで約五十回、大小合わせると一八〇〇回もの火事が起こっています。燃えてもまた再建し、東西各地から運搬されてくる物資や資材が消費されることで内需が拡大し、鎖国日本を救って

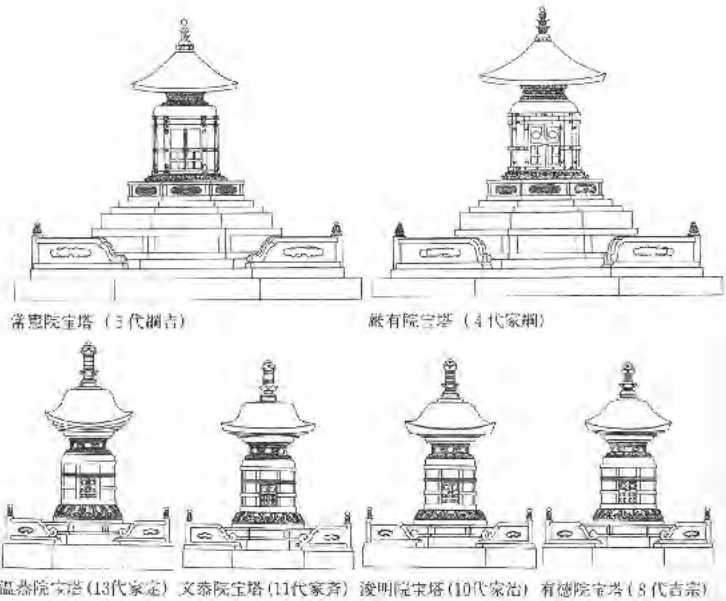


（図8）『江戸図屏風 右隻』浅草寺（国立歴史民俗博物館蔵）

いたのかもしれませんが。人口も京都五十万人、大坂四十万人、中国の広州市八十万人、ロンドン六十八万人、パリ五十五万人をはるかに凌ぐ一〇〇万人超えとなり、ほかの都市には見られない特殊な消費都市であったといえるでしょう。

最後に、江戸の建築の特徴を挙げてみます。一つは仏塔建築です。鈴木何某なにがしという人が品川にいて、この人はなんと長禄三（一四五九）年に天妙国寺てんみょうこくじに五重塔を建てています。これが江戸で一番古い五重塔建築です。この五重塔は元禄十五（一七〇二）年に焼失し、家光が再建しますが再び焼失してしまいます。私が四、五年前に天妙国寺へ行った際、庭に背丈くらいの大きさの石があつたので、「これは何ですか？」と聞いたところ、「ここに塔があつたらしい」と教えていただきました。石の上に乗っていた植木鉢を取ると、心礎しんそといって柱を乗せる四角い穴があいていて、そこに五重塔があつたことがわかりました。すぐに品川の博物館に連絡を入れました。その後、文化財に指定されています。

池上の本門寺ほんもんじにある五重塔は、徳川秀忠が造ったものです。この心柱しんばしらは下まで来ずに、二層目の梁はりのところでストップしています。法隆寺の頃は丈夫にするため、心柱を地面の中まで埋め込んでいました。ところが平安時代になってその根っこが腐り、宙に浮いていることがわかった上から吊った状態のほうに塔が倒れないのではないかということに職人たちが気づいたのです。現在建てられている霞ヶ関の高層ビルなども五重塔からヒントを得ていて、当時の建築技術が今につながっています。



(図9) 寛永寺に現存する宝塔の立面図

出典：「台東区史 通史編2」台東区、2000 年

江戸の建築の二つ目の特徴は、銅板屋根です。天守閣の研究をしていた友人曰く、最初の銅板葺は、家康の駿府城だそうですね。先ほど申し上げたように、江戸城の天守の屋根は鉛瓦でした。しかし家康は、自らの居城である駿府城は、天守を銅板葺にしたのです。調べてみると、寛永年間の後ぐらいまでは、幕府の建物はほとんどが銅板葺でした。その後、銅の値段が下がると市中でも使われるようになります。それでも高価でしたので、大坂などではほとんど使われなかったと思います。ですから、銅板葺は江戸幕府の特許といってもよいのではないのでしょうか。

余談ですが、日本から銅を輸入していた中国は、銅に含まれている金・銀・プラチナなどを取り出して、さんざん金儲けをしていたようです。中国人が書いた『てんこうかいぶつ天工開物』でその事実を知っ

たとき、大変驚かされました。

三つ目の特徴は、靈廟建築です。先ほど見てきたように、靈廟はとても豪華でお金のかかる施設です。そのため徐々に儉約して造られるようになり、寛永寺にある各將軍の宝塔を比較してみると、四代・五代の宝塔は銅製、その後は石製となり、高さも低くなっていることがわかります（117ページ図9）。とはいえ、靈廟建築は江戸以外にはない立派な建築文化です。

四つ目は、町人の住まいである長屋です。人口が増えてくると厨子二階では間に合わなくなり、裏長屋に住む町人が多くなりました。長屋は九尺二間（三坪）<sup>くしゃくにけん</sup>といって、一畳くらいのところに台所と下駄を脱ぐ場所があり、その奥に六畳一間もしくは四畳半と二畳があるくらいの非常に狭い住まいでした。そのため路地のどぶを板で塞いで、縁台などを出して住人が共用しました。しかし便所は共用で、風呂は銭湯通いでした。表店<sup>おもてだな</sup>を持つている家が裏で長屋を経営し、大家が路地の入り口にある門を開閉して管理していました。こうした住まいは明治以降まで続きます。ただ、明治以降は近郊の農村が汚穢<sup>おわい</sup>をもらいに来て大根などの野菜と交換されるようになったので、便所は個々の家にも作られるようになりました。このような江戸の長屋は近代になっても使われていました。

以上「江戸の建築」について概観してみました。江戸のまちは江戸幕藩体制の中枢を担った政治都市で、生産性が乏しい消費都市でした。しかしその体制が崩壊した後、近代国家の首都・東京として蘇<sup>よみがえ</sup>り、世界でも類例の少ない都市になったのです。



連続講演会第七回（令和六年二月二十五日開催）

## 江戸の絵巻を読み解く

講師 小澤 弘

## ◆平安時代に確立された日本独自の絵巻物

絵巻には、大きく分けて二つの種類があると考えています。一つは、できるだけ多くの人が見るために作られた絵巻。もう一つは、普段は奥にしまわれていて、特別な檀家さんがいらっしゃったときや御開帳の際にだけ見せる、特別な絵巻です。今回ご紹介する絵巻の多くは前者に該当します。

前者の代表例としては『道成寺縁起絵巻』(図1)が挙げられるでしょう。今も和歌山県日高川町にある天台宗の古刹・道成寺を訪れると、二種類の絵巻を用意していて、絵解き説法を聞くことができます。五十年から一〇〇年もすれば絵巻が擦り切れてしまうので、消えかけては写しを作り、また消えかけては写すというのを繰り返し、現在まで受け継がれているのが実情です。

絵巻物を見る際にはあまり意識しないかもしれませんが、「右から左へ見ていく」というのが大きな特徴となっています。これは、かつての中国や韓国、日本など東洋では一般的な見方でした。今では、西洋流の「左から右へ読む」というのが世界的な常識になっています。



(図1)『道成寺縁起絵巻』(海の見える杜美術館蔵)



(図2)『繪因果經』(奈良国立博物館蔵)

すが、絵巻物は基本的に「右から左へ読み」進めていきます。東洋の絵画で「左から右へ読む」場面があった場合、その場面において、大きなドラマ展開やアクションがあることを意味するのです。

日本の絵巻の多くは、詞書ことばがきと呼ばれるストーリーの後に、象徴的な場面を紹介する絵が描かれるという、詞書と絵の構成の繰り返しでできています。この形式は平安時代に成立したもので、日本の絵巻物のスタンダードなスタイルです。こうした絵巻物の源泉といわれるのが『繪因果經』(図2)と呼ばれる巻物。これは、『過去現在因果經』という釈迦の前世と現世の伝記を書いた經典に絵を添えたもので、下段の経文に対応する絵が上段に描かれていて、右から左へとストーリーが展開します。

やがて、平安時代に入ると『源氏物語絵巻』のように、詞書とハイライト的に入ってくる絵の組み合わせという絵巻物のスタイルができあがるわけです。そして、屋根・天井を省略し、柱と梁のみを残して、斜め上から描く大和絵の技法の一つ「吹抜屋台ふきぬきやたい」や、面長の顔に長い黒髪、切長の細い目、鉤状の鼻という大和絵における顔描写の典型的技法である「引目鉤鼻ひきめかぎはな」といった人物表現が特徴として現れてきます。

日本で絵巻物が独自に発展していくのには、一般的な仏画のように厳粛で

高尚なものが絹地に描かれたのに対し、紙に描く「紙絵」が世俗の世界を描くものとして広まったことが背景としてあります。「右から左へ」の流れの中で躍動感をもってストーリーが展開する点、風景や風俗を事細かに描きこんでいく点というのが、日本の絵巻の特徴となっています。

### ◆浅草寺と寛永寺に伝わる縁起絵

ここからは、江戸の絵巻について具体的にご紹介していきます。

まず一つは、寺社の起立に関わる縁起絵です。台東区の寺社といえば、何といっても、飛鳥時代の推古朝に起こったとされる浅草寺があります。浅草寺に関する縁起絵として浅草寺に現存する中で、伝応永本と呼ばれる室町期の絵巻と、江戸前期に狩野氏信が描いた極彩色の絵巻の二つが有名です。

前者の伝応永本『武蔵国浅草寺縁起』（図3）は、推古天皇三十六（六二八）年、隅田川から観音像が示現したという浅草寺のご本尊にまつわる縁起を描いたものです。描かれたのは



（図3）『武蔵国浅草寺縁起』伝応永本（浅草寺蔵）



(図4) 狩野氏信筆『浅草寺縁起絵巻』寛文本（浅草寺蔵）

十六世紀後半の永禄年間と推察されますが、定かではありません。絵は稚拙であるものの、文章はしっかりと浅草寺の起源について語っています。漁師の檣ひのくま前はまなり浜成・竹成兄弟が、現在の隅田川で何度網を打っても魚はかからず、観音像が引かかるばかりだったため、最後にはその仏像を掲げて拝み、土地の長・土師真中知が祀りました。やがて、祀った建物が大きな観音堂へと変化し、七度の火災に遭っても観音像は飛び出して無事であったという靈験譚が描かれています。

一方、立派な縁起絵巻として作られたのが、寛文本『浅草寺縁起絵巻』(図4)です。こちらは狩野氏信筆の作品で、寛文二(一六六二)年に沼田の城主滋野信澄が寄進したものです。浅草寺の観音が出現し、それを祀る過程を描いた後、後半ではいわゆる三社祭の神輿渡御みこしとぎよを描いています。

さて、徳川家康は江戸に城郭都市を建設しましたが、その後徳川將軍家は、狩野探幽すみのよしよけいや住吉如慶といった、当時の代表的な絵師に頼んで縁起絵を作らせました。例えば、狩野探幽の『東照宮縁起絵巻』(日光東照宮)では、家康が生まれることを靈夢として

見るといふ話が描かれています。また、駿府城で太政大臣に任じられる家康、大坂陣役に出陣する家康などです。京から江戸にやってきた狩野派が幕府の御用絵師として君臨していくのは、この狩野探幽の力によるものが大きいわけですね。同じように、京の大和絵師・住吉如慶も日光や川越仙波、紀州などの東照宮のために『東照宮縁起絵巻』を依頼され制作しています。

もう一つの代表的な寺院である寛永寺の縁起については、住吉如慶の息子で、江戸前期を代表する大和絵師だった住吉具慶すみよしぐけいが、二つの絵巻を描きました。一つ目は、十世紀に活躍した天台宗の僧侶・元三大師、すなわち叡山中興の祖・良源（慈恵僧正）の絵巻。二つ目が、それと対をなす慈眼大師、すなわち寛永寺を開山した天海僧正の絵巻です。天海僧正は元三大師を尊崇しました。両方とも寛永寺に現存します。

一つ目の『元三大師縁起絵巻』は、五巻のうち三巻が現存しており、平安時代を想像させるような大和絵の伝統を引くものです。作られたのが延宝八（一六八〇）年なので、具慶は平安期について時代や風俗の考証をして描いたことになりましたね。

ここでは、二つ目の『慈眼大師縁起絵巻』について全巻見ていきたいと思います。上中下の全三巻からなりまして、始まりは天海が修行する場面です。次いで文禄二（一五九三）年、大変な日照りによって農作物が実らなかったことから、天海は川辺に立って祈りを捧げようとしていました。そこにどこからか女人が現れ、仏具の一つである五鈷ごこを天海に授けます。それを持って天海が祈禱したところ、水中から青蛇が出現し、にわかにかき曇り、大雨が降り注ぎ、その結果五



(図5) 天海、駿府城にて家康と対面  
住吉具慶筆『慈眼大師縁起絵巻』(寛永寺蔵)

穀豊穰となったという、天海の奇譚きたんを描いています。

その後、天海が修行しながら諸国を歩き回せやくいんぞうはくる中、医学者として家康に仕えた施薬院宗伯せやくいんそうはくの使いにより、駿府城で徳川家康と初めて対面した場面が描かれました(図5)。次の段では、叡山にこもって修行をしている場面、次では宮中に呼ばれて、後陽成上皇と対面するシーンが描かれています。

中巻の中ほどでは、家康が乗馬で川越(現・埼玉県川越市)方面へ向かう様子が描かれ、これが川越の仙波東照宮の縁起とつながっていくわけです。ここでは、家康と天海が非常に親しい関係で表現されています。家康の死後、亡骸を久能山東照宮から日光へ移し、日光東照宮を造営する有名な話も描かれていますね。

中巻の末尾では、寛永二(一六二五)年から寛永寺

の建立が始まり、次々と堂塔伽藍どうとうがらんができていっていく様子をうかがうことができます。寛永年間も後半に入った頃の寛永寺の情景を、西の方から俯瞰した絵が続きます。いかにも大和絵風の「すり霞」(横方向に柵引く、大和絵に特有の表現法)を背景として、黒門、山王権現社、清水観音堂、

仁王門、不忍池・不忍池弁天堂、五重塔、多宝塔などが、いずれもとても丁寧に描かれているのです。

下巻では、天海が叡山の東山麓・坂本（現在の滋賀県大津市坂本）に滋賀院を建立し、その奥に東照宮を建立したことが描かれています。寛永十七（一六四〇）年には、嫡男に恵まれない三代将軍・家光から祈禱を依頼された、家康の側室・英勝院えいしょういんが天海に相談した手紙が残っておりますが、ここに天海が家光の嫡男誕生を祈禱する場面も描かれました。

下巻の四段目では、寛永二十（一六四三）年、天海の具合が悪くなった際に、家光がわざわざ天海の元を訪れて手ずから薬湯を与える場面が描かれ、家光と天海の関係の親密さを示すものとなっております。最終段では、この年十月朔日、天海が弟子たちを座敷に集め、亡き後のことを伝えるとともに、家光宛の遺書を書く場面が描かれました。この図の末尾に、延宝八（一六八〇）年の春、住吉具慶が二つ（元三大師と慈眼大師）の絵巻を東叡山の衆僧の求めに応じて描いたことが記されています。そして巻末には、延宝七（一六七九）年冬中旬として、詞書の筆者である天海の弟子・胤海いんかいの署名で締めくくられています。ちなみに、この胤海は施薬院宗伯の息子です。

### ◆変動する江戸の街を緻密に活写した絵巻の数々

ここまで、いわゆる縁起絵に類するものを見ていただきました。駆け足になりますが、以下、江戸に関する絵巻を紹介していきます。

皆さんがご承知のように、江戸開府まもなく吉原という遊郭が日本橋近くにできました。明暦三（一六五七）年の江戸大火により、その遊郭が浅草寺の北裏にあたる日本堤の近くへと移転した（新吉原）というのも、ご存じのことかと思えます。まずは、浮世絵の元祖と呼ばれる菱川師宣ひしかわものぶが、その後の遊郭や芝居町などを描いた大変有名な絵巻『江戸風俗図巻』をご紹介します。

師宣は、自身の工房で多くの『江戸風俗図巻』を制作しており、世界中あちこちに類似した作品が現存しています。今回ご紹介するのは、その原本になるであろう二点です。一つは東京国立博物館の『北楼及び演劇図巻』で、寛文十二（一六七二）年などの款記を持つ作品です。ただし、実際に絵巻に仕立てられたのは、おそらく十八世紀後半のことだろうと思われます。なぜなら、奥書や賛文などを書いた三人の人物がいずれもその頃活躍しているからです。師宣自身、最初から完成を見据えて描いたのではなく、それまでに描いたものを一つにまとめて絵巻に仕立てた可能性が高いのです。

この絵巻は、最初に序文があり、浅草寺の五重塔、本堂、鐘楼、日本堤と呼ばれる吉原へ向かう土手道が描かれています。新吉原の街の情景を描いた後、街路から中の空間へとワープするかのよう、フェードイン・フェードアウトのような形で表現しているのが特徴的です。絵は一六〇〇年代の終わり頃には成立したと考えられますが、実際に編集されて、序文・賛文・跋文ばつぶんが入ってくるのは、寛延三（一七五〇）年頃と考えたほうがよいように思います。

桜川慈悲成さくらがわじひなりの賛文が入ったあと、画面の雰囲気が一気に変わります。芝居茶屋が描かれてい



(図6) 上野の花見の宴 伝菱川師宣筆『四季風俗図巻』部分 (東京国立博物館蔵)  
出典: Col Base (<https://colbase.nich.go.jp/>)

るのですが、歌舞伎の舞台と奥の棧敷席から見る観客の姿、平土間席の観客の姿など、少しアレンジした構成になっています。その後、太神楽や物売りの様子などが描かれ、最終的には鏡磨・湯風呂へのシーンで終わるという流れが、菱川師宣の工房で制作される『江戸風俗図巻』の基本的な構成になっています。弟子が制作した作品で優れたものには、師宣がサインをして世に送り出すという方法が採られたことで、多くの類似作品が出回ることになったわけです(図6)。

師宣の工房で作られた作品の一部を紹介すると、ボストン美術館の『江戸四季風俗図巻』は絹地の上に描かれた非常に豪華なものです。夏の風物の隅田川船遊び、元禄総踊りと呼ばれる盆踊り、新吉原での月見の宴などを描いていますが、最後は必ず湯女と風呂、そして茶の湯の情景がセットになっています。師宣の工房では、このパターンの作品が変化して転写されるのですが、このように絹本の素晴らしい作品もあります。

次に、藤原信香(多賀朝湖)が描いた絵巻をご紹介します。英一蝶と言ったほうがわかりやすいかもしれません。彼は、

五代將軍綱吉の時代に、生類憐れみの令に違反したとして、三宅島への流罪を申し渡されてしまします。その島流しのときに描いた絵が出光美術館の『四季日待図巻』<sup>しきひまちずかん</sup>です。

この絵巻では、日待月待供養（日の出を待つて夜明かししたり、月の出を拝んだりして供養する行事）をする際、能のお面を付けずに形式を崩して舞う「仕舞」<sup>しまい</sup>、小屋掛けの舞台ではなく特別に座敷で演らせた人形芝居などの様子を描いています。島流し中に江戸での生活を思い出しながら描いた作品ですが、そのため、使われている顔料があまり良くありません。一蝶は、後に江戸へ戻ってきていて、往時のことを懐かしむ文章が書かれているので、描写内容は元禄期の雰囲気伝えるものであると思います。

さらに二本の絵巻をご紹介します。一つ目は、大英博物館の『江戸風俗図巻』二巻です。享保六（一七二一）年頃の景観を描いたものと見られます。『上野の図』（図7）、つまり寛永寺をテーマとした巻では、上野の広小路の手前辺りから始まり、馬に乗って寛永寺へ向かう若衆や沿道の店の様子など、上野の街の風景が描かれています。街頭で太神楽を舞って人が集まる様子、花見の



（図7）寛永寺根本中堂『江戸風俗図巻・上野の図』（大英博物館蔵）



(図8) 参詣人で賑わう浅草寺本堂『江戸風俗図巻・浅草の図』(大英博物館蔵)

しつらえをしている参詣人、商売を営む人々など、江戸の日常の風景が事細かに描かれていることがわかりますね。

少し先に行くと、寛永寺の仁王門、黒門があつて、山王社の独特な形の鳥居が見えます。下馬札を過ぎると時の鐘の鐘楼、吉祥閣があり、その奥では大名や旗本クラスの身分の高い人々が花見の宴を催している様子も見えますね。さらに先へと向かい、立派な根本中堂、奥の本坊へと入っていくところで絵はフェードアウトしています。

続いて『浅草の図』(図8)、浅草寺をテーマにした巻を見てみましょう。両国橋から浅草見附の御門を過ぎると、御米蔵の門、食べ物屋、土産物の立ち売り、傘張りをする傘屋の様子など、賑やかな門前町の様子が続きます。駒形堂が見え、さらに進んでいくと雷門があります。雷門から中へ入ると、床見世とこみせが連なっています。これが、現在の仲見世の原型ですね。仁王門から先は聖域に入るため、当時は門の左右に垣根がありました。垣根の内側にはさまざまな商売を営む床見世があり、本堂、熊谷稻荷でフェードアウトします。

最後にベルリン国立アジア美術館の『きだいしょうらん 熙代勝覧』絵巻(図9)を見ていきたいと思います。神田の今川橋から日本橋へ向かって、



(図9) 本石町十軒店の雑市『熙代勝覧』部分（ベルリン国立アジア美術館蔵）

Photo AMF/DNPartcom/©bpb/Museum für Asiatische Kunst,SMB/Jürgen Liepe

江戸城側を奥にしながら見た情景が描かれています。日本橋通りが焦土と化す、文化三（一八〇六）年の「丙寅の大火」以前の日本橋通りの日常風景が描かれています。冒頭の「熙代勝覧」という大きな題字は、当時とても有名だった書家・佐野東洲さのとうしゅうが書いたものです。絵巻のサイズはとても大きく、縦幅はじつに四十三センチメートルもあります。

実際に見てみると、まさにリアルに街の通りの情景を描いています。最近、日本橋のウェブサイトや三越前駅コンコースでも画像が見られるようになりましたので、興味のある方はぜひご覧になってみてください。スタートは、現在江戸通りと呼ばれる街路との交差点（現・室町三丁目交差点）の辺りです。三井越後屋（現・三越本店）の北店・南店があり、駿河町通りが見えます。日本橋に近づくほど立売たちうりが多くなり、この絵巻に登場する人物のうち三分の一くらいの数の人が、ひしめき合って描かれています。真つすぐなはずの日本橋

川が湾曲して描かれるのは、奥行きを出すための絵師の常套手段です。江戸城、富士山を望みながら、船着場と高札場があつてフェードアウトするという構成になっています。

興味深いところをかいつまんでご紹介しましょう。この絵巻のすごいところは、店の名前がほとんどわかることです。江戸では、同心円を描いた暖簾のれんが水飴屋のトレードマーク。牛車で重いものを運ぶ様子や、火事の多い江戸ならではの火の見台・風見も見受けられます。都市はいつも変動しているわけで、まさにその情景がリアルに描かれているわけです。著名人も御用達だった入れ歯屋竹沢伝次の店の商標「松井」も見えます。中国の絵巻の中に似たような構図があるという、寺子屋入門の親子が描かれているのも面白いところです。江戸の街のサインはとてもわかりやすく、赤い布の旗を掲げているのは紅を扱っているお店、青い色の旗や青と白の市松模様は食べ物屋、ファストフードショップなどを表しています。

この絵巻には総勢一六七一名の人物が登場するのですが、女性はそのうち二〇〇名だけです。路上の茶店で、客がみんな鼻の下を長くして美しい女性を気にしている様子がユーモラスに描かれています。こうした日常生活の一コマを丁寧に落とし込んでいるところが、この絵師の特色だと思っています。ほかに、白米の食べ過ぎが引き起こしたといわれる「江戸病えじやまい（脚気）」らしき侍、酒を飲んでいる人の隣に描かれた薬種問屋、子どもたちが猿回しをからかう様子など、日々活動する街の様子が鮮明に描かれていますね。日本橋のたもとに來ると、魚河岸の盛況さを示すように振売ふりうりや立売が大勢います。川には房総沖から來た、カツオなどを運ぶ押送船おしおくりふねも見られますね。

最後、日本橋を越えたところ、南橋詰に高札場があります。高札には人の目では見えないほど小さな文字が書かれています。じつはすべて実際に読めるのです。大高札は通例五枚掛かっていたのですが、五枚では文字が書ききれなかったためか屋根のない外へ二枚はみ出して書き、なんとそれが日焼けしているのです。高札に書かれている内容は、キリシタン禁令、親子は仲良くしなさい、鉄砲などをみだりに持ち込んではいけないという、三つの大事な御触れ（法令）です。この絵師のこだわりのすごさが巻末でなお一層感じられる仕掛けです。

このように江戸の絵巻を見てきましたが、ご堪能いただけましたら幸いです。





連続講演会第八回 クロージングイベント（令和六年三月三日開催）

第一部 講演会

首都江戸の権威化

― 將軍伝説と京都化 ―

講師 大石 学

第二部 トークセッション

出演者 浦井 正明  
大石 学

## 第一部 首都江戸の権威化

### ー將軍伝説と京都化ー

#### ◆二五〇年間の「バックス・トクガワナ徳川の平和」

現代に生きる私たちは、毎日のように戦争やテロ、災害・疫病など、地球規模の危機を見聞きしています。そんな時代でありながらも、多くの外国人たちが日本各地で観光をしています。東京で人気なのは、浅草・上野をはじめとする江戸スポットです。これは日本人観光客にも共通しています。



(図1) 豊臣秀吉画像  
(佐賀県立名護屋城博物館蔵)

かつて江戸時代といえば、明治維新以前の古い遅れた封建時代という見方がありました。しかし最近では、「平和な時代」という新たな評価が見られます。「平和」の発端は、豊臣秀吉が發布した「惣無事令<sup>そうぶじれい</sup>」です。秀吉は「喧嘩や戦争をしてはいけない」という政策により全国統

一を成し遂げたのです（図一）。

この姿勢を引き継いだのが徳川家康です。江戸時代は二五〇年もの間国内で争いがなく、外国とも戦争をしない「徳川の平和」とも呼ばれます。この間戦死者が出なかったのです。

さて、私たち人間は誰しも「皆と一緒でありたい」という普遍性と、「人と違う個性を持っている」という個性性を、上手にバランスさせて生きています。このバランス力を身につけるとこそ、教育の最終目標というのが私の考えです。二五〇年間も「平和」が続いたことは、江戸社会がこのバランス力を持っていた証拠でもあります。

しかし、惣無事令によって国内に「平和」をもたらした秀吉は、他方において朝鮮出兵により、朝鮮・中国とも戦争をしました。この緊張状態を脱し、秩序回復を達成したのが徳川家康でした。現代の日本政府が周辺諸国・諸地域との関係に苦慮していることを考えると、家康と徳川幕府がいかに難しい外交をクリアしてきたかがわかります。

幕末期に日本を訪れたフランス公使レオン・ロッシュは、十四代將軍家茂宛の文書に「二五〇年の間、国内泰平にして目に干伐（かんぱ）を見ざるの洪福（こうふく）を保てるは、世界に聞たる例なき所なり」と記しています。世界を知るフランス公使が、二五〇年間も武器を使用しない幸福な国はほかに例がないと証言しています。

こうした評価も踏まえ、江戸時代は「抑圧的で身分差別の厳しい封建国家・社会」のイメージから、「平和」で人々が安心・安全に暮らせる「初期近代（early modern）」へと変化しています。



(図2)『関ヶ原合戦図屏風』(岐阜市歴史博物館蔵)

明治維新後の近代社会を、江戸が準備したという見方です。

今日、和風や日本風・日本型といわれる社会・文化システムが確立したのも江戸時代です。例えば、家族は、戦争のない「平和」な世の中だからこそ未来への見通しや期待ができ、家系、家業、家計、家産、家訓、家墓など、家を単位とする制度や習慣が確立しました。江戸時代の「平和」が、現代日本の礎<sup>いしずえ</sup>になっていることがわかります。中世までの多元的・分権的な権力から、明治以降の近代一元的・集権的な権力への移行過程が江戸時代だと私は考えています。

そう考えると、明治維新はじつは大したことがない変化でした。江戸時代と維新後の日本社会の間に大きな断絶はなく、むしろ連続として捉えられます。だからこそ今日、日本人も外国人も、近代の中の江戸的なものに関心を持っているのです。

時代を「古代」「中世」「近世」「近代」に分け、「現代社会に深く関わるところで区切ってください」と言うと、多くの方は近世と近代の間を選ぶと思います。明治維新です。

これとは異なり中世と近世の間で区切るとというのが私の考えです。戦国時代を画期として、鎌倉時代・室町時代と江戸時代を大きく分けると、明治維新はマイナーチェンジに過ぎない。ここで注目したいのが、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の合戦です。これは、江戸が「首都」になるための転換点だったともいえるのです（図2）。

### ◆現代社会に連なる江戸の「平和」と教育

日本は古代・中世を通じて、飛鳥、奈良、京都、大坂など畿内が首都でした。一時、幕府が鎌倉に開かれた時期もありましたが、このときの幕府は軍事・警察の統轄部門に過ぎず、一般行政や国家儀礼は一貫して京都で行われていました。慶長八（一六〇三）年に家康が江戸幕府を開いたことで、史上初めて東日本に首都が動いたわけです。明治新政府の大久保利通などは、首都を大阪にしたかったのですが、江戸の集中力や文明力の高さによって、江戸を首都にせざるを得なかったのです。関ヶ原の合戦後、江戸に首都を遷した家康の決断が、そのまま現在の首都東京へと続いているのです。家康が主導したこの転換は、畿内中心に編成された列島社会を、当時フロンティアであった江戸を中心に組み替えるという日本史上最大の国家事業でもありました。

家康は、物流・人流・情報・経済などあらゆるものを畿内中心から江戸中心へと、強引に組み替えました。兵農分離によって江戸城の周辺に武士が集まるようになり、全国二六〇藩を統一支配するうえで、諸藩の江戸藩邸が重要な役割を果たします。人・物・金が江戸に一極集中するよ

うになるのです。

すべての命令が文書によって行われるようになったことも重要です。江戸をはじめ全国城下から離れた農村への指示・命令は、文書で行うようになります。戦う必要がなくなった武士は、文書の重要性が増すとともに官僚化していきます。武士が城周辺に集住したため、町人や農民は自治を行うようになりました。農村には今でもたくさん古文書が残っていますが、多くの人が文字を読める社会、教育が普及した社会になったのです。幕府は町人や農民にも政策を伝えるため、武士向けとは異なり、町人・農民向けの文書を、仮名を多く使うなどして書き分けました。江戸時代は、庶民も教育文化政策の対象となったのです。

ここで注目したいのが、刀の役割です。プロシャ（現在のドイツ）生まれの外交官ルドルフ・リンダウの著書『スイス領事の見た幕末日本』には、「日本という国は、あらゆる文明国の中でも、武器を持つ習慣が最も広まっている国であるので、その危険な習慣の不都合を出来るかぎり避けるために、厳しい規則を採用せざるを得なかった。正当防衛以外の場合でなければ、路上で何人も刀をぬけば重い罪に問われるのである」と書かれています。武器使用に対して非常に抑制的だったことが安定的な「平和」の基礎であり、象徴でもあったのです。

安永四（一七七五）年に来日したスウェーデンの植物学者ツウンベリーは『江戸参府随行記』で、「幕府の役人は同じような二本の刀を携えている。うち一本は本人のもの、もう一本はお役目用の刀と呼ばれ、そちらのほうが長いのが常である。両方を同じ側の帯に差すが、互いに少し交差

させている。役人が部屋に入って座る時は、通常、お役目刀を脇に置くか前に置く」と記しています。長刀は公務遂行のための道具だったのです。

小刀を外さない理由について、安永八（一七七九）年に来日したオランダ人イザーク・ティチングは、「日本人の間では、汚名を蒙り屈辱を受けた場合には、自殺をするのがふつうのことである。（中略）不名誉に陥ることを避けるためには、常に自殺のための道具を手許に用意しておくことが絶対に必要なことである」（『日本風俗図誌』）と記しています。小刀は自殺用でした。

嘉永六（一八五三）年、ペリーとともに来日したペーター・ベルンハルト・ヴィルヘルム・ハインは「刀を使用することは、戦争のとき以外は厳しく禁じられている」（『ハイン世界周航日本への旅』）と記しており、武器を簡単に使用しない状況がうかがえます。現代の警察官も武器を持っていますが、私たちはそれが抑制的に使われると信頼しているため、特に怖さを感じません。これは、江戸時代以来の制度システムだったのです。

落とし物をして自分のもとに戻ってくるのが日本の特徴ですが、これも江戸時代以来の文化です。近代化によって江戸的な文化を捨てるのではなく、むしろ世界に理解してもらい、安心・安全な社会を普及するほうが、世界の人々を安心させられるはずです。明治維新以降、江戸時代を「克服されるべき古い時代」と捉えたため、良い慣習や風習を見逃してしまっているように思えます。

江戸時代の女性に関しても同様です。安政五（一八五八）年に来日したイギリス公使館第一



(図3)『御府内備考』(東京都公文書館)

### ◆御成伝説と江戸の権威化

書記官ローレンス・オリファントは、「おそらく東洋で女性にこれほど多くの自由と社会的享樂とが与えられている国はないだろう」(『エルギン卿遣日使節録』)と記し、江戸時代の女性の地位は東洋よりむしろ西洋に近いと評しています。私たちが西洋近代化の流れで理解していた自立した女性が、江戸時代に存在するという指摘が西洋人によって行われているのです。また、三浦浄心みつらじょうしんは著書『慶長見聞集』で、「今は国治り天下太平なれば、高きもいやしきも皆物を書たまへり」と記しています。「平和」が訪れたことにより、身分に関係なく誰もが学ぶ時代になったということです。本来あるべき学びの姿とは、まさにこのことだと思っています。

次に台東区を含む江戸市中のイメージを話したいと思います。江戸の周辺を見渡すと、将軍が各地を訪れたという「御成伝説」がたくさんあります。

江戸幕府が編纂へんさんした『御府内備考』には、五代将軍綱吉が浅草茶屋町の楊枝商ようじのもとを訪れ、この商人が将軍家に楊枝を納めるようになったと記されています。九代将軍家重は、浅草田原

町で独楽<sup>こま</sup>回しを見て気に入り、たびたび訪れたと記されています。独楽回しは、十一代將軍家斉も氣に入っていました。八代將軍吉宗は、隅田川、中野、飛鳥山、品川に桜や桃の名所を作り、江戸の庶民たちの行樂地・公園を整備しました。「將軍が整備したこと」が由緒になるわけです（図3）。

台東区の例を見ましたが、江戸の各地には、將軍にまつわる多くの由緒伝説があります。江戸時代、新たな由緒や伝説によって、將軍の權威が各地に植えられ、育っていったのです。浅草の例で見たように、將軍の訪れた場所が、由緒ある場所として認識されます。これこそが「大江戸」「江戸っ子」という自負・自信の源になっていきます。ほかの土地では難しい將軍家との関係や、將軍に会ったという経験が自信につながるわけです。

権力都市として成立した江戸には、初めから權威が備わっていたわけではありません。幕府が權威化を図ったのです。当初、京都と江戸には文明格差があり、江戸は京都に劣っていたのです。上野や浅草に京都を模した寺社を築いたように、京都の文明を取り込みながら、京都に負けない文化力をつけることで、江戸に權威をもたらそうとしました。服飾儀礼、建築、庭師、茶人、書家、宗教家、能役者、芸能、医師、学者、棋士、囲碁士、絵師といった一流の文化人は、皆京都から来ています。上方に江戸が追いついて、人々の間に「江戸っ子」意識が生まれるのは、おおよそ田沼意次<sup>たぬまおきつぐ</sup>の時代、十八世紀後半のことです。その後、江戸で上方を圧倒するほどの文化が醸成されていきます。



(図4) 寛永寺

江戸時代は、一〇〇年にも及ぶ戦国時代を克服した「平和」の時代でした。武力から法・教育へと社会秩序・価値が変化し、文明化していきました。江戸の権威は、將軍御成（外出）の伝説化・由緒化・伝統化や、上方の優れた文明を取り込むことにより培われたのです。京都や奈良の文明を受け継ぐ首都江戸が発展し、明治になり天皇が京都から東京に移ることにによって、名実ともに近代首都として完成したのです。

最後に、歌舞伎や文楽の演目『戻駕色相肩』もどりかいろいあいかた（天明八（一七八八）年江戸中村座初演、初世桜田治助作）の一節を紹介します。江戸と大坂で張り合う場面で、「事も愚かや、御殿山に飛鳥山、上野のような桜はあるか」という台詞が出てきます。「江戸には將軍が植えた桜があるが、大坂にはないだろう」と自慢するのですが、

これを受けて大坂は「負けた」となります。將軍の權威が勝っていることを誇っているのです。この演目が大坂でも江戸でもヒットしたことから、江戸權威がスムーズに上昇し、認められたことがうかがえます。

今後日本は江戸の文化が「徳川の平和」<sup>パクス・トクガワナ</sup>の中で築かれたことを世界に発信すべきだと思います。そして日本を訪れた外国の人々は、文化の拠点だった寛永寺や浅草寺をはじめ、さまざまな歴史文化を持つ台東区をもっと知ってもらいたいと思います（図4、図5）。



（図5）浅草寺

## 第二部 トークセッション

### ◆江戸時代の教育は「アラカルトメニュー」

**浦井**…江戸時代の教育について、もう少しお話しただけですしょうか。

**大石**…江戸時代の教育は、近代の私たちが学んできた教育とは大きく異なります。なぜなら、江戸時代の教育は「学びたい人が学べばいい」という考え方であり、競争しないからです。近代の統一的な教育に対して、江戸は大工の子には大工の教科書、商人の子には商人の教科書と、それぞれの身分や職業に合わせて教科書が与えられます。必要な技術と知識、計算力などが最低限身につけばいいので、何歳から学んでも、何歳で学び終わってもいいのです。

さらに学びたい人は、私塾や郷学など専門家が教える学校で学ぶことができます。それでも足りなければ、藩校に入るケースもあります。逆に藩校で学んだあとで私塾に入るケースもあります。今よりも自由に学びのコースや、プログラムを選べるシステムだったのです。

幕末期の私塾に咸宜園かんぎえんがあります。大分県日田市にあった私塾です。広瀬淡窓ひろせたんそくという学者が教えていたのですが、各地から多くの若者が学びに来ます。彼らは学び終わって地元に戻っても、役職や給料が上がるわけではありません。単に学びたいから来ているのです。私は、学びとは本来こうあるべきではないかと思っています。

今日ここに来られている皆さんも、自ら学びたいと思って参加されていると思います。ところ

が、中学・高校・大学には嫌々学んでいる人がたくさんいます。「学ぼう」という気持ちに応えるのが本当の教育です。序列をつけて、有名校や有名企業に送り出すのが教育という価値観から、そろそろ脱却すべきだと思います。江戸時代の教育は、それぞれ個人が自分の人生をしっかりと全うできればいい、全員が同じでなくてもいいという教育だったのです。

浦井…江戸時代の教育は画一的なものではありませんでしたが、最低限の読み書きは誰もがきちんと身につけられるようになっていました。この点からも江戸の教育は見直されているのではないかと、私も思っています。

大石…江戸時代の教育は、好きなときに好きなものを勉強する「アラカルトメニュー」でした。現代の教育もこのようなあり方を大いに参考とすべきだと思います。

#### ◆共同性や共同組織を思い起こさせる江戸

浦井…江戸の下町においても、共同体が非常に強く生きていたように思います。そのあたりをもう少し詳しくお話してください。

大石…兵農分離の後、武士のいなくなった農村に自治が生まれます。農民はそれまでは武士の指示に従って生活していましたが、武士がいなくなるとお互いに助け合って生きていかなくはなりません。そこで生まれたのが、五人組や組合、講などのグループです。助け合う仕組みができあがるわけです。江戸時代の社会は、「共助」が分厚かったのだと思います。

近代は、お互いが縛り合うのを嫌い、個人が自立してこそ社会が発展すると考えたため、次第に助け合いの精神が薄れました。しかし、隣近所が誰かもわからないような状況で地域は運営できません。江戸時代は、現代の私たちに共同性や共同組織・システムの大切さを思い起こさせてくれるのです。

なお、講というのは、地域の人々でお金を出し合って積み立てる仕組みです。一人では資金不足で難しいことも、地域や集団の力を生かして叶えるという創意工夫が許された社会でもありました。

### ◆江戸時代の旅行と女性の活躍

浦井…続いて、江戸時代の女性の活躍についてお話ししたいと思います。江戸時代の女性の活躍といえば『井関孝子日記』<sup>いせきたかこ</sup>や、伊勢神宮までお参り



に行く女性の道中記といった書物も残っています。素晴らしい女性がたくさんいたのではないかと思います。江戸時代の女性について補足していただけますか。

**大石**…江戸時代には、女性たちだけの旅行もあり、それだけ安全な社会だったといえます。当時の旅行はすべて歩いて回っていました。道中、各地で食事を楽しみ、名所・旧跡を訪れ、寝泊まりして各地にお金を落としながら、思い思いに旅を楽しんだのです。

私は、こうした旅行が地域間の経済的な格差を縮めたと思っています。現在の旅行は、できるだけ遠く、無駄なく目的地に向かうので、選ばれる目的地のみが経済的に潤い、地域間の格差はどんどん広がっています。江戸時代の旅行は、街道各地でお金が落ちて経済を回していたので、日本全体をボトムアップする役割を果たしました。一人一人がさまざまな体験をしながら各地域を歩く旅行文化が、「平和」で安定した社会の維持にもつながっていたと思います。旅行をはじめとする江戸の文化は、列島社会を豊かにしたといえるのです。

## あとがき

コロナ禍の中断も含め四年にわたって開催した「江戸から学ぶ」シリーズに続いて、新たに「江戸・たいとう学」と題し、引き続き台東区の歴史と文化を辿ってきた。キックオフイベントを皮切りに全八回に及ぶ講演会シリーズに御出講いただいた諸先生方には感謝の他ない。

法政大学名誉教授・前総長の田中優子先生と東京学芸大学名誉教授の大石学先生には、トークセッションにも参加していただき、それぞれの先生方には、御専門分野のことを分かりやすく話していただいた。

この講座そのものの発想が、服部征夫区長であったことも触れておくべきことだろう。

「江戸から学ぶ」では、台東区のことを中心に話してきたが、今回の「江戸・たいとう学」では、江戸全体の歴史と文化に広げた内容とした。勝手な注文を快くお引き受けいただいた先生方に重ねて御礼申し上げるとともに、この長丁場を終始一貫して誠実に支えてくれた文化振興課のスタッフの皆さんに心から御礼を申し上げたい。

寛永寺住職 浦井 正明

## 講師紹介



浦井 正明

【寛永寺住職】

昭和12年生まれ、東京都台東区出身。慶應義塾大学文学部史学科卒業。東叡山寛永寺山内現龍院住職、寛永寺長膺を経て、令和2年2月より東叡山輪王寺門跡門主・寛永寺貫首。台東区文化財保護審議会委員、台東区教育委員会委員長を歴任し、現在は上野の山文化ゾーン連絡協議会顧問を務める。平成29年10月に台東区文化功労栄誉章を受章。



田中 優子

【法政大学名誉教授・前総長、江戸東京研究センター特任教授】

法政大学社会学部教授、社会学部長、総長を歴任。専門は日本近世文化・アジア比較文化。研究領域は、江戸時代の文学、美術、生活文化。『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞、『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞・サントリー学芸賞。その他著書多数。平成17年度紫綬褒章。江戸時代の価値観から、現代の問題に言及することも多い。



小澤 弘

【江戸東京博物館名誉研究員、淑徳大学人文学部客員教授】  
昭和22年生まれ。明治大学大学院文学研究科博士課程修了。国際浮世絵学会第1回学会賞受賞。タイミンコク「DNA of Japanese Design」展、グリマルディ・フォーラム・モノコ「Kyôto-Tôkyô, des Samouraïs aux Mangas」展を共同監修。著書に『都市図の系譜と江戸』、共著に『活気にあふれた江戸の町「熙代勝覧」の日本橋』『図説江戸図屏風をよむ』等。



松方 冬子

【東京大学史料編纂所教授】  
東京都出身。博士(文学)。著書に『オランダ風説書と近世日本』(東京大学出版会、角川源義賞歴史研究部門受賞)、『オランダ風説書』(中公新書)、『洋学史研究事典』(共編、思文閣出版)などがある。



波多野 純

【日本工業大学名誉教授】  
昭和21年生まれ、神奈川県出身。日本工業大学教授、同学長を歴任。現在は、波多野純建築設計室代表。工学博士。『江戸城Ⅱ』で建築史学会賞、「ネパールにおける仏教僧院の保存修復」で日本建築学会賞(業績・共同)。



大石 学

【東京学芸大学名誉教授】  
昭和28年生まれ、東京都足立区出身。台東区立下谷中学校卒業、都立上野高校卒業、東京学芸大学卒業、同大学院修士課程修了、筑波大学博士課程単位取得、名城大学助教授、東京学芸大学教授などを経て、現在は東京学芸大学名誉教授。



稲葉 和也

【台東区文化財保護審議会委員】  
昭和13年生まれ、早稲田大学大学院博士課程(建築史専攻)修了、元東海大学助教授。台東区および都内外の社寺、民家、近代建築などの調査、指定、保存に当たる。著書：『日本人のすまい』、『建築大辞典』、『日本の建築』、『台東区史』など。



畑 尚子

【國學院大學非常勤講師】  
昭和36年生まれ。國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻修了。博士(歴史学)。日本近世史専攻。國學院大學、青山学院大学非常勤講師。著書に『江戸奥女中物語』(講談社現代新書)、『幕末の大奥』(岩波新書)、『大奥御用商人とその一族』(岩波書店)などがある。



深井 雅海

【徳川林政史研究所所長】  
昭和23年、広島県生まれ。國學院大學卒業後、徳川林政史研究所主任研究員。國學院大學栃木短期大学教授、聖心女子大学教授を経て、現在、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所所長。主著『江戸城御殿の構造と儀礼の研究』(吉川弘文館)他。

～江戸からつなぐ歴史と文化～

# 江戸・たいとう学 講演記録集

---

発行日 令和6年12月  
発行 東京都台東区  
事務局 文化産業観光部 文化振興課  
編集 株式会社DI Palette  
印刷 松本印刷株式会社  
令和6年度図書登録第42号

本紙に掲載している記事や写真等の無断複写、転載を禁じます。

表紙図版：『名所之内上野（部分）』（東京都立中央図書館蔵）



江戸たいとう

台東区

台東区  
台東区  
台東区